

淨

土

號 月 四



昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回「日發行」）
昭和十七年三月廿日印刷・昭和十七年四月一日發行

第八卷 第四號

陸海軍 病院

慰問浄土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

中村辨康著

新刊

日常勤行式講讀

B 6 版二百四十頁
價一圓五十錢
送料十錢

！來出よいよ書の望待
侶伴好養修の携必徒宗土淨

◇本誌に連載し、好評を博した信仰の入門書！◇
◇座右に備へて日常勤行の深意を味得せられよ！◇

淨土宗でいつもお勤めしてゐるお經文に一々懇切な解説がついてゐます。即ち一々のお經文について和譯と意譯をあげ、それに字解までつけて誰にでも解るやうにして、更に著者の燃ゆる信念から湧き出た解説がついてゐます。従つて單なる解説ではなくて誰にも喜ばれる信仰の入門書です。會員各位の修養に、僧侶各位の參考資料と説教その他の教材に最適です。

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替 東京 八二一八七番

浄土四月號 目次

表紙・扉・目次カツト……………中島保

佛光を遮るもの……………山田靈林(四)

三月の朝……………吉田絃二郎(八)

大東亞戦争下の生活態度……………笠森傳繁(三)

宗教全國大會に出席して……………和田正系(三)

隨筆 木瓜の花……………子母澤寛(三)

南海の宗教誌……………中村康隆(三)

浄土隣組座談會……………編輯部(四)

信仰相談……………中村辨康(四)

小説 一本の藁……………佐賀一海(三)

童話 花まつり……………内山憲尙(六)

浄土まん畫部隊……………漫畫協團(四)

歌壇……………與謝野晶子選(二)

俳壇……………太田耳動子選(七)

先師を渡邊海旭先生……………増谷文雄(三)

聖典 誦經 仰ぐ光に誓ひは固し……………大野法道(五)

編輯後記……………(五)



淨土

四月號

無礙光とはこの世界の日、月、燈燭などの光の如きは、もし隔礙あれば則ち照曜すること能はず。しかるに彼の佛の光は十方の世界に徹照せずといふことなし。もし夫れ然らざれば、則ち此の世界の念佛の衆生は、彼の佛の光攝を蒙ることを得ざるべし。

法然上人御法語



係方



佛光ぶつくわうを遮さへぎるもの

山 田 靈 林

○
今日もまた皇軍の素晴らしい戦果で、新聞が輝いてゐる。地圖を開いて、あれこれと通りつゝ、何ともいひやうのない歡喜に、うつとりしてしまふ。毎朝毎朝、私たちは皇軍への限りなき感謝の中に、銘々の職分にと起ち上る。

しかしながら、この感謝が、この歡喜が、この意氣が、いつの間にか、心の奥の奥の深い戸張の中に隠れてしまふ。午さがりから夕暮れ近くにかけての私たちといふものは、自分でも顧みて、身の毛のよだつほど、あさましいものになつてゐることが少くない。私たちはどうして、かうなのか。武力戦線の將兵方のやうに、どうして難しくあり得ないのか。

信念がないからである。信念の火、これを燃え上らしめねばならぬ。信念の熱鐵丸、これが烈々、炎を吐いてゐるところに、迷暗はあり得ない、憂悶はあり得ない。

信念を思ふとき、私はいつも法然上人を思ふ、そして親鸞上人を思ふ、親鸞上人が師匠法然上人の導きを信じて、いささかの疑ひどころなく、ただ念佛して彌陀にたすけられまひらすべしと、よきひとの、おほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」と申される、その徹底した信念、念佛はまことに淨土にむまるたねにてや、はべるらん。また地獄におつべき業にてや、はべるらん。總じてもて存知せざるなり」といつて、人が何といはふとも、更に動搖いたされない、堅牢なる信念。かういふ徹底したる信念、堅牢なる信念を、私たちがもち得たならば、と思ふ。

○

熾烈なる信念、堅牢なる信念、それを得る最も近いただ一つの道、それは私たちの「我」を折ることである。信念の人は無我である、謙虚である、敬虔である。

親鸞上人が師匠法然上人を思ふて申される言葉のその一節を拜しても、上人がいかに無我であり謙虚であり敬虔であるかを仰がしめられる。「自分は法然上人に、たばかれてもいゝのだ、念佛をしろといはれて念佛を申してゐる、その外に別の子細はない。淨土に生れ得ないで、地獄に落ちてしまふことゝなつてもいゝのだ、私のやうなものは、自分の力ではどうすることもできない人間である。地獄に落ちるより外に、もともと詮なき人間であるのだ」といふ意を

上人は申されてゐる。

無我であるとき、謙虚であるとき、敬虔であるとき、信念が、熾烈なる信念が、堅牢なる信念が、その人の身に心に満ち溢れる、

かくのごとき人、これを佛家の人といふ。大悟の人といふ、大行の人といふ。

○

道元禪師の正法眼藏の生死の巻に曰く、

ただわが身をも心をも放ち忘れて、佛の家に投げ入れて、佛の方より行はれて、これに従ひもてゆくとき、力をも入れず、心をも費さずして、生死を離れて佛となる。

と、私たちは「我」を捨てねばならぬ、身ごと心ごと捨て去らねばならぬのである。

「我」を捨てしまへば、何もできないと、私たちは思つてゐる。

「我」を張つてゐてすらかななか、事はうまく運ばない。

「我」を捨ててしまつたら、何一つできはしないと、私たちは思つてゐる。

それがそもその間違ひである。

「我」は悪魔である、「我」はあらゆるものに災ひする悪魔である。

「我」は佛の御力をさへも遮り、佛の御光をさへも蔽ふてしまふ。

「我」を捨てねばならぬ、「我」を撃滅せねばならぬ。

○

見るもの聞くもの、何もかもが疳癪にさはつて仕方のない日がある。鋭く自己を反省することを怠らない人はいふ、餘りにも忙しからだ、心に落ちつく暇がないからだ。

まことにその通りである。おつとりとした氣もちで、疳癪を起してゐる人などはない。心の餘裕、その得られないのは、しかしながら、それは忙しきからではない。心の中に「我」がいきりたつてゐるからである。

「我」を無くさねばならぬ。「我」を無くした日には、何もできなくなつてしまふ、と私たちは思ふが、それが既に「我」である。「我」を無くさねばならぬ。

私たちは自分の力では何一つ爲すこともできない無力者であることを思はねばならぬ。仆れた箸を一本起すそれすらも、自分の力でやれるのではない。宇宙の神秘力、絶對不可思議の御力、それが働くところに、何事も爲されゆくのである。

私たちは無力である。自分の顔に生える鬚一本、それを生やすまいと、いくらあがいても、どうすることもできぬ。それほど私たちは無力である。

無力であることが、本當に納得できるとき、私たちは無我になる、無我になると、絶對不可思議の御力が、身に心に満ち溢る。

れて、「力をも入れず、心をも費さずして」そのとき、そのところに、その人が當に爲すべき、正しきこと、善きこと、美しきことが、行はれゆくのである。

○

増上寺の御本堂に在します阿彌陀佛の御前に、私は幾たびおまゐりしたか、そして幾たび御相好を仰ぎまつたか、もとより數へつくされぬ。御相好を、くつきりと、いつでも、思ひ浮べることが出来る。御相好を思ひ浮べることによつて、どんなに有りがたい悦びを頂いてゐるか、言葉にも筆にもつくされぬ。

數年前であつた、御本堂におまゐりして御相好を仰いで私は實に驚いた。それは阿彌陀佛の白毫の御光を、御像の眉間に發見したからである。發見といふ言葉は穩當でない、しかし然ういはずにあられないのである。

阿彌陀佛の眉間に、大きい白毫光が輝いてゐる。それを私はその日まで、どうして拜み得なかつたのであらうか、御相好の中でも特に明らかに拜めねばならぬ白毫光が、どうして拜めなかつたのであらうか。

私に偏見があつたからである、私に「我」があつたからである。私の「我」が白毫光を遮つて、私に拜ましめなかつたのである。

つひ此の間であつた、某所に催された會からの歸途、乗りものゝ都合が悪く、超満員のバスに乗ることゝなつた。乗つて小半時も揺りに揺られた後、漸く座席に腰をおろすことができた。腰をおろすと、同行の某氏、それは某舊家の主人であるが、實に感懐深い口調でいひ出された、「私は娘をバスの車掌に使つて貰はうかと思ひます」と。

私は思ひがけない言葉を聞いて、意を酌みかねてみると、某氏は言葉を以て申された。

このバスの車掌さんに、しみじみ感心しました。先きからの人ごみです。嚙みつくやうにいふ人があつた。難詰した人があつた。不機嫌な人があつた。私も實は疳がたかぶつて怒鳴りたくて仕方がなかつたのです。が車掌さんは何といはれても、顔色一つ變へないで、終始一貫、ものやはらかに、しかも敏活に、應對まことに流るゝが如しです。すつかり參つてしまひました。あの娘は無我そのものです。天女ですよ。實にものやはらかな温い聲で、親切に世話をしてゐる。あゝいふ娘は、一生不仕合を知らずにすみます。私も娘を車掌にして、あゝいふ娘を見做はせたいと思ひます。

——といはれた。車掌さんを勤めれば、誰れでも天女のやうに、

優しい、温い心の人になるとはいへない。同じ花品に育つても、立派な花の咲くのもあるし、曲りくねつて醜い姿になるものもある。一概にはいはれないが、しかし人の氣の荒み易い人ごみのバスの車掌さんになることは、確かに大修行の一つだといふことはできる。この頃のバスは「我」を撃滅するための、善き道場の一つだといふことはできる。

ひとり娘のための問題でない。私たちも自分の「我」を始末するための、善き道場に實なる修行をいたさねばならぬ。

「我」のない営みほど、人の心を打つものはない。それがどんなに小さい営みであつても、家庭日常の一些事であつても、「我」のないそれが、かもし出す美しさ悦ばしさは、いかなる言葉を以てしても讃へつくことができぬ。

ある日の會であつた、會の初めに阿彌陀經が讀まれた、一千人に餘る人の齊唱であつた。讀經は人を聖感に打たれしめる。

讀經は人間の「我」を消えしめる。

讀經をお唱名を、千人なら千人、百人なら百人、十人五人三人でもいゝ。一つ心でこれを致したい。同行同修いたしたい。人々と一體一心にこれを修するとき、光耀の限りなく漂ひ満つるを覺えしめられる。



三 月 の 朝

吉 田 絃 二 郎

今年は二月の二十二日に庭の鶯を聴いた。去年より五日早い。

いつも寒い冬の間どんなにか鶯の音を待つてゐたことであらう。だからかつては鶯の初音を聞けば、家中の人々を呼び立てゝは鶯の初音を聞かしたものであるが、今はたゞ獨りで靜かに初音を聴くばかりである。

じつと獨りで坐つてゐると、裏の竹山から流れるやうにして鶯の聲が響いて来る。無心に聴けばただ無心の鳥の聲に過ぎないが、心に思ふことあつて聴けばまた有情有心の聲である。佛の聲であり、神の聲である。

わたくしの庭の竹村に沿つて梅が咲いてゐる間は鶯は毎日來ては鳴いてゐる。鶯にしても鶯に

しても梅の花を好むものらしい。

いつの間にか鶯が來鳴かすなつたと思ふと庭の梅が散つてしまつてゐることに氣付く。鶯を聴くためには梅の花を咲かせなければならぬ。

佛さまの御聲を聴くためにも人間は自分の心に梅の花を準備しなければならぬのであらう。自分の心に雜草ばかり生やしたのでは佛さまの御聲は聞えなくなるのであらう。

朝はやくわたくしたちが眠つてゐる間から裏の竹山には鶯が鳴いてゐる。だから朝寢をすればその日一日鶯を聴くことができる。こゝにも佛さまの御聲を聴くための心の準備が必要になつて来る。いつであつたか佛の命日に佐藤賢順師がお向に見えられて讀經をしてをられた。佛間の北の丸窓を明



けて置いたが、讀經の間すつと窓近く鶯が鳴いてゐたことがあつた。今でも佛前に香を焚いては思ひ出すことがある。

今朝は(三月十一日)はじめて庭に四十雀の高鳴きを聞いた。もう春が來たのだと思ふだけでも嬉しい幾度めぐりあふべき春であるか知らぬが、春に逢ふといふことはかぎりなく嬉しい。これも日本に生まれたおかげであらうが、四季折々の移りかはりといふものが何れほどわたしたちの生活を生き甲斐あるものとしてゐるか知れない。わたくしたちは春に生きるよるこび、夏、秋、冬に生きるよるこびを持つてゐる。常世の春でないところにこの國の恵みがある。

この頃の或る朝わたくしは味噌汁の中に入れられた蒔草を箸に挟んだまゝしばらくじつとながめてゐた。

その朝わたくしはしみじみと蒔草の甘さと、その葉色の美しさを今さらのごとく感じてゐたのであつた。たゞ一葉の蒔草である。しかし何といふありがたしい甘味であらう。何といふ柔かな、そして艶

艶しい葉であらう。

わたくしたちは今まで餘り恵まれ過ぎてゐた。だから一葉の蒔草の尊さを忘れがちであつた。けさの發見はこの頃野菜に乏しいからの悟りである。乏しいことも恵みである。殊に人間の思想的生活に於いて。

×

戦線に在る日本の勇士たちは大砲に注連を張り、撃ち出す彈丸を拜んで装填し、或は魚雷を抱いて寝る者もあるといふことである。これある哉である。日本人は子供のころから物を大切にすることを教へられてゐる。それは外國人の經濟的觀念から來る物の大切さに依るものでなく、物を作り出した人そのものに對する感恩感謝の念からである。

一粒の米も大切にせよといふ考への中には、米をばぐくみ育てた大自然の力に對する感恩と、それを作つた農人の勞苦に對する感謝の念がこめられてゐる。歐米の物質文明に育てられた人々にとつては砲彈や魚雷は數學的に割り出された一塊の物質に過ぎない。われわれ日本人にとつては砲彈も魚雷も物質



以上のものである。精神そのものである。

歐米の勞働者たちは賃銀によつて砲彈を作る。わが産業戰士たちは昔わが刀鍛冶たちが日本刀を打つたやうに、神聖な表現として彈丸を作り、魚雷を造り出す。刀劍は神體として作らるゝがゆゑに神殿に納めらるゝ。わが日本人によつて作らるゝ時、砲彈も魚雷も精神そのものとなる。

日本人の生活に於いてはすべて物質は直ちに精神化さる。こゝに日本人の偉大さがある。

わたくしの知人は或る外國人に日本精神について永い間講義をつゞけてゐた。その外國人は熱心な日本精神研究者で茶道などは日本人以上に通じてゐた。或る日わたくしの知人は、その外國人に、一軸の巻物を見せてやつた。何うしたはずみか、その巻物がほどこてくると疊の上に轉がつて行つた時、外國人は足を伸ばして巻物を留めた。わたくしの知人は烈火のごとく憤つて言つた。

「いやしくも君は日本精神を研究しようとする人ではないか。足を以てこの巻物に觸れるとは何事だ！」外國人は顔を赧らめて詫びた。

手を以て巻物を押したゞくところに日本精神があり、足をもつて物を扱ふところに歐米人の唯物的生活がある。

マレイ戦争の俘虜たちにドラム罐を運ばせたところ、かれ等は兩手を組んだまま、兩脚でドラム罐を押して行つたといふ新聞記事があつた。日本人であつたら必ず兩手を使つてドラム罐を押す。こゝにもドラム罐に對する彼我の心構への相違が見出さるゝ。この頃朝のラジオで佐々木信綱博士は、その先考が、本を読むに際して本の折り目を付けないやうにときびしく教へられてゐたことを語つてをられた。書物を読むをり、わたくしたちはやゝもすれば書物に折り目を付け易い。學者らしいゆかしい嗜みだと思つて聽いた。

一冊の書物も、一枚の紙も感恩の心で取り扱はなければならぬ。

一粒の米も神佛の賜物である。一粒の米を大切にするか粗末にするかに、その人の尊卑が別れる。

乃木大將はいつでもお米と言つた、決して米とは言はなかつた。ありがたい武將の心がけである。

歌

壇

興謝野
皇子選

東京 上野 昌子
あなうれし大みいくさに我が夫
も召されぬ御代に仕ふる

評 大東亞戦争の空に海に陸に越々たる皇軍の勇武と大戦果に皇國民の自覺と歡喜を一瞥切實なものとしたこの大御代に生れ大東亞開放の聖職を扶翼したてまつる泰さよ、まして第一線に夫を子を父を召された家族の感激は云ひあらはしやうもないことであらう。今月の歌には皇軍の赫々たる功績を反映して戦つての墜れた歌が多いのは喜ばしい。國民精神の昂揚も一段たかめられた感がある。

京都 福島 幸治郎

ニユウス見てこれかと思ふ
りいくさに出でたよりなき子の
評 出征した我がからは何のたよりもない元氣で御役に立つてゐるとは思つても親心は落付かない。たまたまニユウス映画の中に我子に酷似した顔を見出して胸ををどらせる親の心が歌ひ出されてゐる。

名古屋 長谷部 静子

かしこみて起きてぞ聞かんこの夜
更け凱歌を告ぐる臨時のニユウス
評 また大戦果の特別発表が夜更けてからあつた。その聞くニユウスの薩の

皇軍の勇武と憐憫たる訓練を思ふ時
たまで聞くのは餘りに勿體ないそこ
で起き上り襟を正してきき乍ら低頭し
たと云ふのである。

京都 華山 千高

わが機未だかへらざるもの三機で
ふ尊き散華きて哭くかな

北海道 前野 賢一

此の戦果かけの惨苦をしのびつつ
病床に祈りぬ友の武運を

愛知縣 稻本 利一

病床にて皇軍の戦果をききて
生きのびて皇國の聲の言の葉の榮

長野縣 照谷 準一

ゆる時に逢ふぞ嬉しき
國あげて戦へるなり新年の餅もか

長野縣 丸山 力園

しこみ手あはせて食む
初勤務ことの無かれと霜ふかきケ

長野縣 丸山 力園

エブル線路われば歩みぬ
打ち振ふわが鶴嘴に霜柱きらめき

勤勞奉仕 一 聲

散りて冬日輝く

奈良縣 寺田 佛子

療養の身ながら國につくすべき道

やいかにとおもひわづらふ

北海道 寺田 佛子

いささかの葉すらしかり思ふこと

思ふがままになるは嬉しき

東京 富 幸子

初雪を共に愛でんと言ひし君何處

の野邊に鉢とりますや

静岡県 一向 山人

必勝を期する東亞のたたかひの春

とはなりの梅しろく咲く

満洲 光 明子

雪の山人の手をかり登れるも子に

逢はむため友次いづこぞ

北海道 花田 順往

聖戦に召されし吾子はかへり来て

忝けなくも勳章をうく

奈良縣 寺田 佛子

友はみな醜の御桶と出で立つにわ

れひとり病む何のむくひぞ

大分縣 渡輪 桃舟

大君に捧げし命惜しまずに病みに

死ぬを惜しむつるかな

京都 齋藤 耕善

おのが身は南の海に消ゆるとも遂

に護らん日の本の國

北海道 深谷 百哉

北の國十勝野なれど我が家は谷間

につづき小川流るる

北海道 中村 もん

一億の血潮が染く大東亞空海陸に

戦ひぬかむ

富山縣 南本 富心

子は征きてひとりの母が留守を守

る家のともしび寒夜に洩るる

秋田市 羽後 慎隨

傷つきし兵をいたはり今日も亦病

床に筆談終へて歸りぬ

福岡縣 西山 博

わが國の護りはかたし前線も銃後

も今は一つ心ぞ

東京 細田 初枝

はるかなる機上の人とは如何にかと

火鉢かこみつ爆音きくも

東京 押野 尚秀

命をも捨てかねまじき火と燃ゆる

戀せしことも若き日の夢

大分縣 竹田 子葉學人

新玉の春にふるさと訪へば我母老

いぬ髪しら雪

投稿規定

はがきに一回二首以内と
して「神土」欄に寄稿願
ふこと
あて住所氏名明記の上送
ること



渡邊海旭先生

先師を語る(十二)

増谷文雄

渡邊先生(わたなべせんせい)のことは、

わたくしにとつては、
いくら書いてもなほ物

足らなく思はれます。思ひめぐらすと、今からもう十七八年も前のことであるが、わたくしは、學校を出るとすぐ芝中學校の教師になった。そのころはひどい就職難の時代であつたが、幸ひわたくしには、二三教師の口があつたので、そのいづれに就くべきかを、然るべき先輩に相談をしたところが、その人は、即座に、

「渡邊さんの學校がよい。」

とのことでありました。それから約八年の間、渡邊先生がなくなるまで、わたくしはずつと芝中學校の教員として、先生のもで教

員生活をつづけました。その間、わたくしはしみじみと渡邊さんの學校がよいと言つた先輩の言葉の意味を味ふことが出来たのでありました。

渡邊先生が教育者として、すぐれた存在であつたことは、既にこまごまと述べておきました。佛僧たるものはまた、勝れたる教育者でありたいことを、わたくしは今もなほかく肝に銘じてをります。しかも、渡邊先生がこの學校においてわたくしどもの前に示現した人格の不思議は、決して單なる教育者のそれではなかつたのです。わたくしはさきに、渡邊先生がすぐれた律僧であり、學者であり、國士であり、社會事業家であつたことを述べました。そのあらゆる面が、天衣無縫、柔剛自然にわたくしどもの前に示現せられたのです。

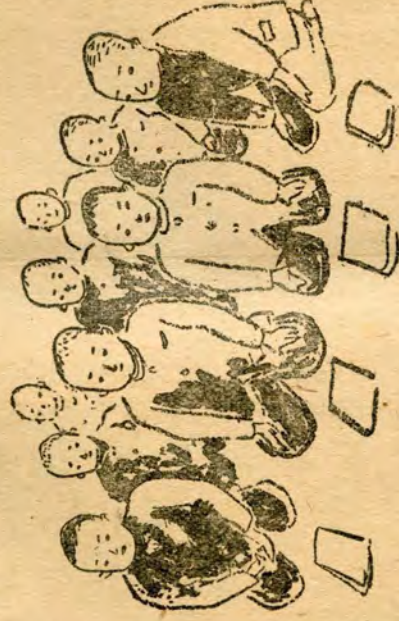
わたくしは、渡邊先生の學校にきて、本當によかつたと思ひまし

た。わたくしは生涯において、これほど偉大な人格的影響の下に立

つことは、再びあり得やうとは思は
れません。わたくしは、この人格の
下で八年間も働くことを得た因縁
を、つくづく慕はずにはわれませ
ん。それとともに、わたくしのこの
眼で見、この耳できき、この心で感
じつた先生の面影や、希聖の能ふ
かぎり書きのこしておきたいと思
ふ。心の切なるものがあるのです。だが、
この「先師を語る」もすでに十一回
に及びました。渡邊先生のことだけ
をもう五回になります。記しの上
した渡邊先生の逸事二三を書き加へ
て、この巻で一應筆を揃えたいと思
ひます。

二

老中學校は一般には普通の中學と
異なるところはありますが、御承知
のとおり浄土宗の經院するところであり、關係から、何といつて



も宗門寺院の子弟は、自然この學校に集つて参ります。それらの、

宗門の子弟に對しては、幾分特別の訓育を施す
ことになつてをりました。

ある時、なにの節のことであつたか、放課後
の宗門の子弟だけが、増上寺の黒本殿の御前に
集まり、讀經一會ののち、渡邊先生の法話を聽
聞したことがありました。この時の一節を、わ
たくしは今でも、肝に銘じて記憶してをりま
す。

——諸君は僧家に生れ、佛子たらんとしてゐ
ることに、大いなる誇をもたねばならない。
僧侶であること、僧侶たらんとしてゐること
に、少しでも自卑の感をもつやうなことがあ
つてはならぬ。僧は人天の師である、三世の
導師である。この人天の師たり三世の導師た
らんとするものが、自ら卑めるがごときこと
は、以ての外である。

その邊までは、わたくしも漫然と拜聽してゐ
ました。だが、それから先の言葉は、聽かされ
てゐる生徒よりも、引率してゐるわたくしども

が、ぞくりと胸を打たれる思ひでありました。

——しかるに近時、自ら僧侶たることを蔽はんとする傾向が、しばしば自分の眼にふれることがある。殊に、その姓名が、僧たるか俗たるかの判然としないものが屢々ある。かくる傾向はもつともいけない。

わたくしはその時、ひそかに面のほてるのを感じました。御存知のごとく、わたくしの姓名は増谷文雄である。この文雄は「ぶんゆう」である。幼名を茂樹といつてをつたものを、僧籍編入とともに文雄としたのであるから、これは真正眞銘の僧名である。しかし、この文雄はたしかに「ふみを」と呼ばれがちである。それをよいことに、わたくし自身もまた屢々「ふみを」を用ゐなかつたであらうか。

わたくしは「はつ」と、むねを突かれました。同僚の宗門出の教員の中には秀雄といふ名前の方もあつた。秀香といふ名前の方もあつた。その人達がその席にあつたかどうかを、わたくしは今記憶してをりませんが、もしあつたとすれば、矢張りおなじ思ひであつたことと思はれます。

それ以來わたくしは、ながく自分の名前について疑問を抱いてをりました。だが、考へてみると文雄といふ名前は古來僧分の人に少くなかつた。明治以後では南條文雄博士がござる。明治のすこし前には、富永仲基に論評をいどんで『非出定後語』を書いた了蓮寺文雄といふ僧侶もあつた。それらの人々はよもやその名前の「ふみを」

と讀めることを利用しはしなかつたであらう。それでよいのだ。わたくしもさうすればよいのだと、やつと安堵することは出来たのでありますが、あの時の渡邊先生が、烈々として僧たるの自覺自負を説かれた言葉は、いつまでも忘れることがないであります。

三

渡邊先生がカルピスのことに言及されたことが、よく考へてみると、時折ありました。何でも益々暮には、一ダース位のカルピスが西光寺の臺所にまひ込むやうなお話してありました。だが、まさか渡邊先生が「初恋の味」を看板にして賣り出したカルピスの愛好者とも思はれなかつたので、この不思議な言及をも、わたくしはほんやり聞きすごしてをりました。

ところが、後になつて知つたことでありますが、渡邊先生とカルピスとは、切つても切れぬ深い因縁があるのでありました。益々先生のところからカルピスが届けられるのも當然でありました。先生はカルピスの名づけの親であつたから驚ろいたものであります。

だが、よく考へてみると、なるほどと首肯づくことが出来るのです。あの近代的なほひの豊かなカルピスといふ名前も、もとをたせば梵語から來てゐることです。梵語では醍醐味のことをサルピスといひます。それに當時流行のカルシウムを揉合して、カルピスといふ名前がここに生れたのです。つまりカルピスといふ言

葉は佛法所縁の言葉であります、しかもその風韻はどこまでも近代的であり、またその内容には近代科學の所産を盛つてあるのです。一言でいへば、甚だ古くして、且つまた甚だ新しいのです。なるほど渡邊先生の所案の名前として首肯することが出来ることも、またこの名前を通じて、渡邊先生の風格の一端をうかがふこと



も出来ると思ひます。

四

渡邊先生が淨土宗の執綱となられたこと、國士館大學ならびに鏡泊學園の學長に就任せられてゐたことに就ても、最後にすこし觸れておきたいと思ひます。

執綱といへば、淨土宗における總理大臣の地位にあたります。出家は名利を捨てることを教へられてをるといへ、多少とも宗教に關心をもつほどのものは、この地位に就くことを願はしく思はない筈でありますまい。だが渡邊先生は、逃げまわつて逃げまわつたあけく、到頭つかまつて、無理やりにこの地位にすわらされたのであります。

わたくしは宗門の行政のことをまるで存じないので、そのころの情勢のことを充分知つてはゐないのですが、ともかくその頃は、宗門の若い層の人々が、舊い層の人々にとつて代らうとしてゐる時代でありました。舊い層の人々の力はやうやく失せた。しかし、若い層の力はなほ充實してゐなかつた。さういつた時代であつたかと思はれますが、この時に當つて、若い人々が先生をかついで、もつて初志を貫かうとしたことは、充分に肯くことが出来るのであります。

渡邊先生はいつも若い人々の純眞を愛してをりました。若い

人々はまた、いつもこの先生を仰いで、庇護者となし、棟梁となすのがつねでありました。そして今、宗門の若い人々は、先生を執綱に推して、以つて宗政に新しい時代を開き出したのであります。

その動きは、渡邊先生のもとに平和な教育生活をしてゐたわたくしどもを脅かしました。この校長をとられてはならぬと思ひました。先生に執綱になつて貰つては困ると思ひました。先生もまた全くその意思なきもののごとく、

「僕は執綱にはなりません。」

と明言してをられました。だが、若い人々の熱意はつひに先生を動かしたのです。先生はつひに若い人々の情にほだされたのです。

それとともに、芝罘學校のわたくしども教員のねがひもまた其ことを得たのでした。先生は校長を辞することなしに、執綱に就任されました。

五

渡邊先生が國士館大學の學長に就かれてゐたことは、國士型の教育者として先生の聲望がいかに高かつたかを物語つてをりますが、亡くなられる前年滿洲の鏡泊學園の學長に就くこととなられたのも、またおなじ意味において記憶さるべきことであります。

鏡泊學園といふのは、東滿牡丹江省の山中、鏡泊湖畔に創立され

た學園であります。鏡泊湖は東滿第一の風光明媚の地であつて、荒涼たる滿洲にあつては珍らしい。そゝろに内地の風光をしのぶべき處であると聞きます。ここに、滿洲事變の直後、將來滿洲の中核たるべき人士を打出するための學園を創立し、渡邊先生をその學長として仰いだのであります。

だが、渡邊先生は間もなく亡くなられたので、つひに一度も鏡泊湖畔に足跡を印することなくして了りました。従つて、この學長の就任はつるに有名無實であつたであらうと思つてをりましたが、先年わたくしは、滿洲視察のみぎり、その決して然らざることを知つてびつくりしたことであります。

その節、わたくしは牡丹江に立寄つて、省次長をしてをる同窓の友人の歓迎の宴を受けました。その席で、はしくもわたくしは、會つて鏡泊學園に學んだといふ開拓廳の役人から、悲壯なる鏡泊學園の物語をきくことを得たのであります。

その話によると、創立まもなく學長たる渡邊先生の死にあつた學園の人々は、先生の分骨を乞ふて學園に安置し、これを守本尊として、開拓に學業に、晴耕雨讀の學園生活をつゞけてゐたのであります。が、何しろ山中邊鄙の土地であるので、しばしば匪賊のおそふところとなりました。殊に、この地方に一時匪賊の猖獗をきはめたころには、當局から引揚の警告があつたが、學生たちはどうしても背かなかつた。先生の骨を埋めた地を去ることは出来ないといつて踏

みまづつたのです。そのため、昨晩の禍を受けることも多く、學監樹下氏以下多數の死傷者を出しましたが、いまなほ數十人の學生は、銃と銃と筆とをもつて、よく先生の遺骨埋葬の地を守つてをる。その烈々たる鏡泊學園の精神は人をして哭かしむるものがあるとのことでありました。

わたくしはこの話をきいて、先生の精神の影響力の偉大さに、今更ながら感を深くしたことであります。

【附記】 これをもつて、ながらく続けた「先師を語る」を一應う



組合
査定
済

送料
内地 三十六錢
外地 三十二錢

特免更生革靴！

本品ハ中古ボツクス又ハ其他新品
皮ヲ改造シタル優秀短靴ナリ
短靴 共十三圓七十四錢
短靴 共十三圓七十四錢
靴 共十三圓七十四錢
靴 共十三圓七十四錢
編上靴 共金十四圓四十錢

◎實用新品紳士靴

プタ甲皮堅牢代用底手製實用品
短靴 (公) 金十一圓五十錢
名古屋市西區堀詰町

ナゴヤ商會

各工場
購買部
納入品
百貨店
販賣業組合員
(カタログ進呈)

振替名古屋五一八番、三三四〇〇番

ち切ります。この他にも述べべき先師はすくなくありませんが、また筆を改めてかきたいと思つてをります。なほ、これまでに書いた行誼上人以下三師の分は、全く稿を別にして、鏡仰會の出版部から單行本として刊行して貰ふことになつてをります。その節はまた御愛讀を願ひたいと思つてをります。なほまた、その新稿を充實するために、新しい資料がありました節は、是非とも御教示をいたゞきたく希望いたします。わたくしの住所は「東京市世田谷區鎌田町四四八」であります。

(齋藤清畫)

膽力
強化
小心恐怖症
矯正新法
説明進呈



出来る新自宅矯正法が發賣され大好評中「浄土讀者」と記入し至急ハガキ申込次第「内容説明書」無代進呈す

申込所 東京市澁野川區西ヶ原町三四六 瑞穂社研究所

話 童

花 ま つ り

内 山 憲 尙

すみれ、たんぽぽ、れんげ草
花の おやねが 美しい

あま茶の 中から ひよつこりと
お出に なつたか、おしやかさま

天上 天下を ゆびさして
お立ちになつて いらつしやる

小さな ひしやくで お茶くんで
かけて あげましよ、おしやかさま

てふも小鳥も たのしさを
今日はあなたの 花まつり。

二年生になつたばかりの、敏子さんは二階の子供部屋で春の光を全身にあひながら、讀本を讀んでゐます。

讀み返し讀み返し、何回讀んだことせう、天上、天下をゆびさして

おたちになつて いらつしやる……

敏子さんは、讀本の中の繪を見ました。美しい花の咲き亂れてゐる中に、おたちになつてゐらつしやる、お釋迦様のお姿——お元氣で、おやさしいお姿が描かれてありました。お生れになつた時のお釋迦様のお姿です。じつと見てゐた敏子さんは、

「おかしいな！」
と叫びました。



二階からトントンと降りて行つた敏子さんは、奥のお部屋でお仕事をし
てゐらつしやるお母さんのと
ころへかけつけて來ました。
「お母さん、この繪はどうし
てゆびさしてゐないのです
か。」

敏子さんは讀本を開けて、
お輝迦様の繪をお母さんに見
せました。

「なんですつて？」

お母さんには何のことか解
らなかつたのです。

「御本には、天上、天下をゆ
びさして……と書いてある
のですけれど、この繪はゆび
さしてゐないぢやありません
か」

お母さんは御本を手にとつ
て、じつと見てゐらつしやい
ました。



らつしやいますね。」

「そうね。この繪は、指をみんなのばしてあ

「どうしてなの？」

「さあ、これはお母さんにも解りませぬね。

あしたは、四月八日で淨西寺さんもお花まつ
りですから、學校から歸つたら、淨西寺の先
生に尋ねて見ませう。」

敏子さんはお母さんから御本を受取りまし
た。

「よく勉強しましたね。それでは、おやつを
あげませう。」

お母さんは茶籠箆から、ビスケットの入れ
ものをお出しになりました。六七枚紙につゝ
んで下さいました。

八日が參りました。花まつりです。

學校から歸ると

「お母さん、お寺へ行きませう」

「そう、昨日のお約束ね。では御本を持つて
いらつしやい。」

敏子さんは、お母さんに伴れられて近くの
淨西寺へ參りました。淨西寺は日曜教園を開
いてゐて、敏子さんもお母さんも毎日嚧生徒と

して通つてゐますし、お母さんは時に婦人會の時においでになるので和尚さんとは親しくしてゐられます。

お母さんと敏子さんは、和尚さんのお部屋に通されました。

「實はこの子が、私にわからない質問をしますのとお伺ひに上りました。」

大學を出たと云ふ若い和尚さんは元氣に

「何んです、質問と云ふのは？」

とニコニコしながら敏子さんのお顔を見乍ら申しました。お母さんは讀本の『花まつり』のところを開けました。

「この本には、天上天下をゆびさして……と書いてあるのですが、この挿畫は兩方共、指をひろげてゐらつしやるのです……どうしてかと聞くのです。」

「どれですか。」

和尚さんは本を取り上げて、じつと見てゐましたが

「なる程、そうですね。天上天下を指さして

……」

敏子さんは、先生が、どんなお答へをされるかと、お顔をのぞき込んでゐました。

「これはね、昔の古い印度の御本の中に、お釋迦様がお生れになつた時、お生れになるとすぐ七歩お歩きになつて、右手を高く天を指され、左手は地を指され、天上天下唯我獨尊と云はれたと書いてあるので、それをあらは

したのですね。そしてこの繪は奈良の東大寺の誕生佛のお姿を寫したものです。東大寺のお釋迦様は天平時代と申しますから随分古いもので一尺五寸の金銅佛です。快慶と云ふ人が作つたもので實によく出来てゐます。たしか國寶になつてゐたと思ひます。それをそのまゝここにのせたのですね。」

「その誕生佛は、指をつけてゐられるのですか。」

「そうですね——寫真を見せませうか。」

和尚さんは立つて行つて、本箱の中から、佛教辭典を取り出されて、東大寺の誕生佛の寫真を示されました。

「これで、實に子供らしく、丸味を持つた

よいお姿でせう。」

「なる程、これですね。そう云はれるとよく似てゐますね。」

和尚さんは言葉をついで言はれました。

「そら、人差指を出して、こんなにするよりも、やはらかに指を全體まげたこの形の方が、美しいでせう、そしてこの方が自然です、ことに生れてすぐの赤ん坊には、人差指をしつかりとのばして外の指を折つて指さすことは出来ないでせう。」

「そうですね。」

「敏子さんに解りましたか。」

敏子さんは、大きくうなづいて見せました。

「今日の日曜日に教園へ來たら、又よく話してあげませう。」

「どうもありがたうございました。」

お母さまは丁寧にお禮をなさいました。

「どうもありがたう」

敏子さんも、お母さんに倣つて頭を下げました。



「甘茶がありますから、甘茶を持ってお歸りなさい。」

「ありがとうございます。」
女中さんが持つて来て下さった、竹筒に入つた甘茶をいたゞいて、和尚さんに挨拶をして、表へ出ました。本堂の前には美しく飾られた花御堂が出来てゐます。「お釋迦様に甘茶をおかけして歸りませう。」

お母さんと敏子さんは、花御堂の中に立つておいでになる、お釋迦様に甘茶をかけて、掌を合せておがみました。敏子さんは、お釋迦様のお手を見ました。この釋迦様ははつきりと右手の人差指を上へのぼし、左手の人差指を下へのぼして、天上天下を指さしてゐられました。

「お母様、このお釋迦様は、指をのぼしてゐらつしやいますよ。」

「ほんとにね。」

「お母様、これは國寶にはなれませんか。」
この言葉を聞いてお母様は、

「ホ、ホ……」

とお笑ひになりました。

空には高く雲雀が鳴いてゐました。

(福 田 勇 臺)

◎是非御試用下さい

にんにく粉末
固形にんにく
そてつの實

特約店大募集中です

静岡市上香谷町

神谷 昌 孝

電話二八六三番



大東亞戦争下の生活態度

笠 森 傳 繁

大東亞戦争開始以來の皇軍の實に偉大なる戦果に對しては、國民は唯感激と感謝との念で胸が一杯だ。これ全く御稜威の下に、決死必勝の信念を以て奮戦力闘せらるゝ陸海空將兵各位の御蔭である。

そしてそれは前戦において砲烟彈雨の間に挺身奮闘せらるゝ勇士の力に依ると共に、戦局の全面を統括して帷帳の内に善謀明斷せらるる將士の功に因るのである。この眞に萬古未曾有の皇軍の威力と戦功とを次々と見聞するとき、一般國民も亦その能力を最高度に發揮して、職域御奉公をも勇躍奮起せぬものはない。知能に優れたるものは主として知能を以て、體力に優れたるものは主として體力を以て、何れも優れたるものは其の何れをも活用して、共に國防國家の確立の爲、一億一心に總力を發揮し、滅私奉公の大進軍に参加してゐる譯である。殊に大東亞戦争終局の目的たる大東亞共榮圈建

設の爲には、皇軍の戦闘に引續いて、政治、經濟、保健、衛生、宗教、教育等諸般の文化施設に於ける特に活潑なる前進が肝要である。武を先頭にする文の後繼こそ、洵に喫緊事と信する。更に其れ等は大東亞の諸國諸地域に於いて行はるべきと共に、無論我が國そのものの内に於いても進められねばならぬ。何となれば大日本は大東亞共榮圈の核心にして、大東亞と言う扇の要だからである。こんな感激と信念とをもつて、この頃の日々々々を生きる私は、絶えず自己の微力と不敏とに強き反省を繰返し乍ら、凡ゆる機會に又諸方面の人々から、或は感じ或は教へられ、實に最近ほど意義深き日常は、今迄の私にはなかつたのである。そして茲にこれ等所感教示の二、三を掲ぐることも、亦決して無意義ではなからうと思ふ。

二

大東亞戦争は既に關印を降し、瀛洲におよんでをり、ビルマを制

し、印度にも近づいてきた。斯様にして大東亜共榮圈の範圍は洵に廣大にして、その内に包含される民族も亦頗る多い。これら廣大なる圈内に於ける多數の民族をして、夫々所を得せしめ、その中核たる日本の施策に悦服せしめるには、實に宏遠なる精神と雄渾なる經綸とを要する。その大精神は肇國の精神を基とすべきこと勿論なるが、之を隨所に光被するには、東亞の大思想を初め、世界に於ける凡ゆる大思潮をも攝取醇化して、これらを活用せねばならぬと信ずる。かゝる精神的思想的計畫と動員とは、眞に重要事と思ふが、然らば現に主として之れ等を擔當するは誰か。官に於いても、民に於いても、其の職域を之にもつものは、今こそ御奉公のため絶好の機會と、大いに勇躍精進すべきであらう。そして軍の作戰に於ける計畫と動員とが、あの偉大なる戰果を收めたやうに、この精神戰、文化戰に於ける計畫、動員も亦、均しく偉大なる實績を擧ぐべきを企願する。平素精神方面の學者、學生を以て任ずるものゝ責務は、かくて無限に加重されてゐることを痛感する。

大東亜共榮圈建設の大經綸は、諸般の方面に亘らねばならぬが、經濟方面の事項も亦その一重要事項であらう。そしてそれは大東亞内諸國の問題であり、從つて日本國內の問題でもあり、國內經濟の強化も亦極めて肝要である。かく考へるときに、之はその中の一つの問題であるが、配給機構の改善の如きも大いに必要であらう。今では餘程減じたと思うが、都市の一部に行はれた食糧購入の行列

の如きは、勞力活用の上からも、保健衛生の上からも、大いに考慮すべきことであらう、それも亦官民一體となつて、工夫を凝らすべき事項で、殊に經濟學徒に課せられたる問題の一だと思ふ。

三

次に述べたいと思うのは、最近出會つた二つの出來事と其の際の實感とである。一つは友人笠井君の逝去したことで、洵に悲しい事實であり、今一つは亡父の爲に追善法要が営まれたことで、眞に有り難いと思つた事柄である。

笠井君と言ふは、二十餘年來大正大學の法學の講師たりし笠井英一君のことである。同君は昨春腦溢血で倒れ、専ら靜養に力められたが、去る二月十四日遂に永眠せられた。同氏は多分大正九年大正大學の前身宗教大學に就職し、十一年外遊の際から私が氏に代つて同大學に勤むることゝなつた。氏は十三年歸朝後再び同大學の法學を講じ、私は經濟學を受持つて、爾來約二十年間、懇親なる同僚として交誼を續けたのである。否笠井氏と私とは、更に古く高等學校以來の同窓の友であつた。そして同じく笠の字の附いた姓なるが爲に、屢々彼我混同された位に特殊の關係にあつたのである。其の笠井君が忽然として他界せられたので、洵に感慨無量と言ふか、哀悼と慈傷の情に堪へない。笠井氏は實に活潑明朗、正直で親切な人であつた。長く官界にあり、中途に辯護士となり、又教師となつた。

行くところとして可ならざるはなしであつたし、至つて强健、大いに爲すあるの仁であつたに、眞に惜しかつた。しかし今にして思へば、氏は餘りに多忙であつた。そして少からず無理な活動を續けた。かつ健康自慢で、養生に油斷があつたとも言へよう。時局下の我れ等の生活は壓々無理な活動をも押切るだけの健康が必要だ。しかし、其の爲には機會ある毎に成るべく餘裕を作り、勢力を蓄へる必要があらう。勤勞の後には疲勞あり、疲勞の後には慰勞が肝要だ。大いに勤勞せんには適宜慰勞を忘れてはならぬ。これ長期戦下、國民活動の要諦と思ふ。實に笠井君は其の逝去を以て、この要諦を教へたと云へよう。氏の永眠を悼むと共に、氏に代つて時局下に御奉公すべき我れらは、大いに各目の増健に留意するを要する。

私の父は私の一高在校當時、即ち今より三十五年前に、故人となつたのだが、昨秋私が大正大學傳職二十周年に際して、父の追善の爲に同大學講堂御佛前の備品として、卓子一脚を寄贈したに對し、二月二十五日即ち父の命日の前日に、同大學は父の追善法要を営み下さつたのである。その際私は謝辭の中にも述べたことであるが、子としての私に取つて、こんな有り難い事は未だ曾て無かつた。この催の趣をば、豫め郷里の母へも傳へたのに母も當日は同時に佛壇の扉を開いて御詣りするとて、衷心からの感謝の意を表してき、實に我が一家の甚大な法悦であつた。私の父は安政五年、日米條約問題のあつた年に石川縣に生れ、明治十年西南戦争の年に二

十歳にして家督を繼ぎ、同二十二年町村制實施の年に居村笠岡村の初代村長となり、間もなく之を辭したが、明治四十年五十歳にして死亡の年迄、約二十年間村會議員を勤続した。幼にして漢學の塾に學び、長じて師範學校に入り、其の後同窓の友人中には、郷關を出でて或は學界に、或は政界に活躍した人も多く、父の心中青雲を望むの情も往來したことと思ふ。しかし父はその使命として村を護ることに終始した。頗る酒を嗜み、煙草をも好み、遂にこれが爲に病を得、比較的短き一生であつた。私は父から豊本の思想と護村の精神とを授けられ、同時に又節酒と禁煙との要を教へられた譯だ。この時局下に護村も節酒禁煙も特に肝要と信ずる。私は在りし日の父を偲びつゝ、これ等のことどもを、あれやこれやと思ひ出すのである。

四

更に今二つ此の頃感じた事柄を述べて見たい。私は先日所用の爲め東海道を旅した。左程急ぐにも及ばなかつたから、各駅停車の普通列車で西下した。雪降の寒い日であつた爲か、室内は割合にすいてゐた。私の向には六十五、六歳の元氣さうな老紳士が席を占めた。汽車が横濱へ着いた頃から、彼は原稿用紙とペンとを取り出して頻りに何か執筆してゐる。中々達者に、些の滞りもなく、さらさらと書く様子は、彼の文筆力と頭腦の明敏さを思はせる。かゝ

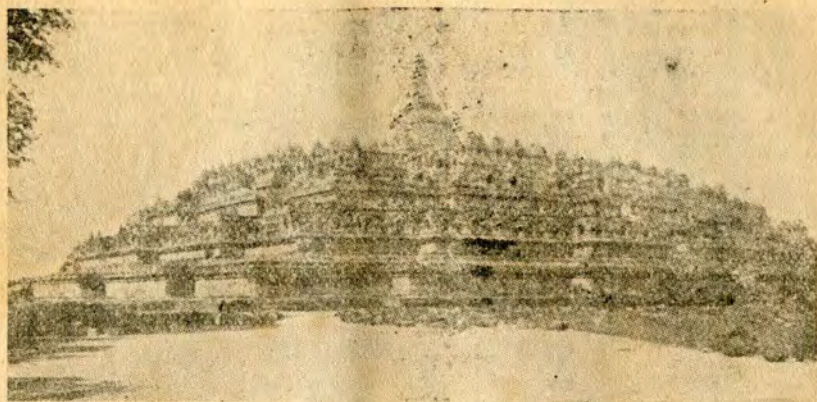
る文筆の士には屢々青白い顔をした才人を見るのだが、彼はその反對に、肥えて血色も良く、實に頭健さうな老人である。隨行者との話し工合から察するに、何處かの軍需工業統制會あたりの役員らしい。そこ迄は別段異とするにも足らぬことだが、それからが變つてゐる。否少くとも私には一寸眞似の出来ぬ體當だと思つた。丁度十二時頃になると、彼は包の中から自家製のサンドウキツチを取り出し、原稿を書き々々一切れづつ頼張つてゐる。其の内にどうした機みか一、二片ころ／＼と泥ぼこりの床の上に落ちた。彼はそれと氣付き、手を伸べて拾ひ、平氣でそれをむしやむしや食べてゐる。その時彼の靴が雪どけの泥にまみれてゐるのを知つてか、泥ぬぐいの布を取出して拭き取り、手に泥の附いたのを氣にせず、サンドウキツチを食ひ續ける。私は其の神經の太い無頓着さに敬服すると同時に、何を食つても平氣な其の胃袋の強さに感服した。文弱と言ふか、私共は餘りに泥や埃に神經質であり、潔癖過ぎる胃袋の持主のやうだ。急に眞似も出来まいが、時局下の我れらの生活は、これ位なことは何とも思はぬだけの強健な胃腸を持つやうにと、工夫する必要を痛感する。

次に今一つ愉快なる最近の出来事がある。それは私の一人の教へ子某氏が、颯爽として南方の或る任務に立出したことである。同氏は職務柄この方面のことに無關係ではないが、命令を受けたと言ふ譯ではなく、謂はゞ志願の意味で、進んで之に應じたのだ。少くと

も一、二年は相當の困苦と危険とを突破して、活動することが期待される仕事である。彼には若い妻の外に二人の幼兒があつて、氏の出發後には妻が子供を抱いて留守をせねばならぬ。氏はこの話を受けるや、直に私を訪ねて意見を求めた。何時立つのかと聞けば、二、三日後だとのことで、全く切迫した出發だ。妻には全く突然のことである。その心情は察するに餘りある。しかし私はその場で答へた。曰く君が良いと思つたら、行くが良い、僕は萬事を考慮して見るに、それが良いと思ふ、行くことに賛成だ。氏も亦即座に言つた。それで安心だ、自分もその決心である。妻も勿論異存がない。私は氏のこの勇斷に衷心から敬意を表したのである。戦時下の我れらは、何が職域御奉公として第一の任務かを考へねばならぬ。勿論それには時と所とを考慮に入るべきであらう。又平素から心の準備も身の準備もして置くべきである。そして今こゝで之が第一の御奉公と判斷したら、何を指いても斷行すべきであり、假令其れが如何に小さいことであらうとも、決して大きいことに於いてをやである。

つかへまつる道としあらばまつしぐら斷して行ぜむ大事も小事も、これは私の三年程前からの自作の座右銘である。我が教へ子の一人が、其の南方行に於いて、正に之を實現したことを、私は涙ぐましい程に慶びお祝ひした。そして、昨日同氏から無事活動の報に接しては、一層の悦びを重ねたのである。

(カットはボロブドルの全景)



南海の宗教誌

中 村 康 隆

マライ半島の原住民には尙ほ山の民(オラン・ブキツ)と海の民(オラン・ラウツ)と

に分たれる概稱ジャクン族其他の舊マライ族等があり、之等の民族構成から出發して半島の宗教史は眺められねばならない、殊に海幸彦族は水上生活を營み小舟で南海の島々を乗廻して時には海賊も働いたらしい活動的な海洋漁撈民としてマラッカ海峡の兩岸やその島々に分布し、尙ほボルネオの東岸からセレス以東の沿岸に擴がるバジャウ人もその一味とされるもので、畏くも眞如法親王の薨去の地羅越國は半島南端に在つた一小國名と推定され、或はこの海ジャクン族の呼稱に基くものではなかつたかとも考へられてゐる。然し今は戦局の推移を追つて南海全般に遠く眼を

向けることにしよう。

ここに南海と呼んだのは、通常マライシアとかインドネシアとか稱される所謂大東亜海の諸島嶼とその沿海とを含めての謂である。この南海諸島の民族構成も從つてその宗教・文化の成層も、大體マライ半島のそれと相似してをり、概略ピラミット型の層位を成して組立てられてゐる。次第に南海の民族・文化の根幹に觸るゝ順に大別していふならば、ごく近來の移住にかゝる少數の搾取的支配階級であつた新舊基督教を奉ずる歐米人と、略二十世紀に跨つての移住史を有つ東洋諸民族即ちサラセン王國の伸張に伴ふアラビア人や南印諸民族等の回教徒商賈の遷民と道儒二教を混和せる佛教の遷奉者たる支那人商賈即ち華

僑の移住民と印度教や佛教を奉じてゐた印度の殖民などと、及び此等遷住者の宗教・文化に多大の感化を蒙つた、とはいへ未だに固有の民族的宗教がその生活感情を裏付けてゐるマライ人其他の雑多な原住諸民族との三者から構成され、若し宗教文化を大別すれば基督教と回教と印度教及び佛教と民族的固有信仰との四階層が見られる譯である。

頂點の低く底邊の廣い此の三角形の基底を成す原住諸民族もまた永い歴史に埋もれてゐる民族移動の結果現在の分布を有つに至つてゐるもので、人類學者はそれに就ても興味ある民族移動史の大筋を再演して語つてはくれるが、今は詳述の餘裕がない。原住諸民族中の基本を成すもの即ち數的に最も多く文化的政治的にも重要な地位を占むるものはオーストロネシア人種たるマライ族である。就中その新マライ族即ち文化マライ人はインド教やマホメット教等の外來宗教文化の染色を有つた民族で、北部中部比律賓諸族、ミナハサ人、アムボン人、チモール及びフロレス兩島

民を初め爪哇、ボルネオ、スマトラの一部の者が基督教化しバリ及びロンボク島のバリ人が佛教を混へた印度教を殘存する外は、殆んど凡て——少くとも形式上は回教徒となつて居り、その八割迄はスンニ派のシャーフイ教派に屬してゐる。特にマライ半島ベラク州



(ムンドの廢寺)

に傳はる九十九ヶ條法規や爪哇島のニチ聖典等はシャーフイ的回教法規に則つてゐると言はれる。舊マライ族に屬する者としては、マライ半島附近のジャクン諸族、ボルネオのダイヤク諸族、セレベスのトラジャ族、比律賓の異教諸族等が著名で、若干の回教徒と殘存印度教徒、及び少數の基督教の開教民の外は殆んど今に固有民族宗教を遵守してゐる。

その外、小スンダ列島の東部からモルツカ諸島南部にかけての原住民には多少とも所謂太平洋ネグロたるバプア族の混血が多く、殊にニューギニアに近い諸島の住民はバプア系とされる。同じネグロイド系に屬する短身縮毛の倭小黒人種ネグリート諸族としてはマライ半島のセマン族、アングマン島人、呂宋のエタ又はアエタ族、バラワン島北部のバタク族、ミンダナオ東北部のマヌス族等があり、(ニューギニアにも見出されてゐる)原始的な一神の崇拜を以て聞えてゐる。ウエッドイド即ちインドオーストラリア人種とか類猿種とか前ドラブイダ人種とか呼ばれる、原始民

族としてはマライ半島のサカイ又はセノイ族、大ニコバル島内地のシヨムベン族、スマトラのサカイ族、タラン人、タブン人セレベスのトアラ人、トケア人、ムナ島のトムナ族等があるが、その生活文化は殆ど舊マライ族に親和して了つてゐる。舊マライ族には長頭型インドネシア人と短頭型原始マライ人とが區別され、前者はカスピ海種のネグリトリーやインドオーストラリア人と混血して生ぜるオセアニア的コーカシア人種で、更に東遷してメラネシア人ともなり第一次ボリネシア人ともなつたもので、後者はビルマ、タイ、安南等の大半の住民と同系の南方モンゴル系人種に屬し、それが大陸でアウストロアジア語族たるモン・クメル系民族と混合し、又インドネシア人とも接觸したもので、現在舊マライ族の主流をなし、その中の或者が東遷して第二次ボリネシア人——嘴みベテルを主文化特徴として一に檳榔民族といはれる——となつたと見られる。新マライ族も南方モンゴル系を主要素とし、ヒンヅ人等の後期移住者の

文化と血とを交へて自發的にやゝ高度な生活文化をもつに至つた民族で、學者に依ては安南東京福建等の南支沿岸住民の皇紀六世紀頃の大移動が主成因だと見る人もある。兎に角悠久の歴史の動きに於て幾多の民族移動の波が此の南海の島々に寄せては返し寄せては返してその民族と文化と宗教とに幾層調の響きを殘してゐるのである。そして原始的な漁獵蒐集牧畜の文化形態はネグリトリーやヴエツドイドや舊マライ族の一部に行はれるけれども、南海一般の主文化相はモン・クメルの始源をうたはれる米食と稲作とを營む自由母權制農耕文化に基調を置き檳榔嘴みの、風習と弓文化を伴ひ、また自由父權的牧畜文化とトミズム的狩獵文化の要素を混在してゐるものである。殊にその農耕は秀れた水田灌溉と鹽鹼耕作とに達し、嚙作の爲の動物供犠と新穀饗宴乃至は人身御供や首級習俗をも併せ有つてゐる。従つて又そこには呪物としてのの髑髏崇拜も認められるのである（ボルネオ等）。舊マライ族の一部にみられた人食の風習

もその本來の意味は農耕的咒術の現れに過ぎない。このやうに南海原住民の文化複合は相當高度の發達を有つてゐたので、之をその永い民族移動史と結付けて、埃及やスメル等の古代文化の繼續をば南海文化の中に認めようとする學者もある。「太陽の子」を以て天來の支配者と戴く「日の子」民族は、母神崇拜、人身供犠、巨石構築、太陽神話、灌溉耕作、二分組織、母權制等の複合文化を有つ「陽石文化」とか日の子文化とか呼ばるべき文化形相を、黄金と眞珠とを追求めつつ東漸して埃及からスメル、インドを経てインドネシアや太平洋の島々に齎らし、終にはアメリカ大陸の一部にまで傳播させたといふのである。所謂マンチエスター學派の文化傳播説がこれであるが、勿論一種の學的臆測を出でないとしても、天降始祖の子を王とし太陽を崇拜する神話を有つセレベスのトラジャ諸族などは日出づる國の聖天子の落下傘によつて天降つた天兵の出現に如何なる感慨と憧憬を持つて歡迎したことであらうか。尚ほマライ族の宗教の

基礎は生靈觀複靈觀に立つ精靈崇拜と彼等に見らるるアモックと呼ぶ狂燥症に見らるるやうな謂はば熱帯ヒステリー症の神經質に基く巫術(シヤマニズム)とで之に天神觀念を併せ加へての三色を以て此の農耕文化に色彩を加へてゐるものである。

初めに述べた外

來文化の諸要素の中、原住民の生活文化に最も強く深い影響を有つたのは、その傳來が古い丈に、假令外面的には僅かにバリー人の間にしか行はれてゐないにせよ

今日も尚ほその内面生活に痕跡を印してゐる、印度教と佛教とである。印度支那半島からマライ半島スマトラ島にかけての地方は古くから金地國(スバルナプーミ)とか金洲(スバルナヴィーバ)とか呼ばれて南海に富を



(景風葬火の島リバ)

求むる印度商賈を吸引した處で、皇紀七・八世紀頃には北印からも南印からもビルマやマライ半島を通じて或は直接にスマトラを経てジャバにまで大乘佛教と印度教が入つて來て、その殖民地的諸王國を各所に建設した。殊に南印カリンガの濕婆教は眞言密教と結付いて

此等の地方に入つたらしく唐の記録に爪哇を訶陵と呼んだのも之に依ると見られる。スマトラ島バレーマンのシリキジャヤ王國や爪哇のモジョボヒト王國はかうした印度教と混和した佛教を尊信した王國でその影響はマライ

半島の佛教王國狼牙脩や盤盤にも及び、ボルネオ島にも殖民して影響を残してゐる。今日中部爪哇ヨクヤカルタ地方のクヅ州マゲラ附近には東洋のビラミットと稱されるボロブドール大塔があり那蘭陀寺系羅迦曼荼羅の立體的表現とされ、尚ほ近くにムンドヤパヤン等の佛堂の遺跡もあり、更にソロ即ち、スラカルタ王領に入つてサバク河流域にカラサン、サリ、ルムブン、ブラムバナン等の概稱ブラムバナンの佛殿が残つてゐるが、之等は今に再現の努力が拂はれてゐる。之等の印度教は然し皇紀十七八世紀以來回教徒の南海侵入に伴ひ次第に壓迫されて皇紀二一三八年モジョボヒト王國の滅亡と共に僅かにバリーに遁入して今に佛教的印度教を傳へてゐる丈となつて了つた。然し今に表面のイスラム化にも拘らずマライ族の生活文化は印度的宗教文化と深く結合したもので、宇野博士の如きはマライ族の宗教狀態を概括してインド教の果實を民族的宗教の肉汁で煮てマホメット教の容器に盛つたものと評して居られる。



隨筆

木瓜の花

子母澤寛

一

老妻が、日向で古い竹籠へ木瓜を生けてゐる。どういけて見て

も、どうにも氣に入らないらしいのを、わたしもこつちから眺めてゐた。こんな事のまるでわからないわたしにも、氣に入らない。何んとなく、びつたりしないものがある。わざとらしく拵へてゐるといふやうな感じが、何處かに見える。

老妻は、むかし少しばかりやりましたいろ／＼な古い流儀からそのまゝ、抜け切れずにゐるのがいけないのでございます。自分ではもう、あれもこれも踏越えて來た氣でゐても、やつぱりかうして形の、いや形と申すよりはその形のうるほひの上に、その垢がまざまざと見えて參ります。人間と申すものは困つたものでございますといつた。

毒氣深入だねとわたしもいつた。何にかの經文の中にそんな文句

があつて、それが強くわたしの心に残つてゐる。大勢の子供の中、その毒氣の深く入つたものだけが、父の本當の慈悲をさへ感ずる事が出来なかつたといふやうな話であつたと思ふ。

五十年のこの世の生活は、本當に數多くのいろ／＼な毒氣をこの身にも心にもしみ込ませてゐるであらう。自分が氣づかなくても、人間は生れ乍らのものでゐられないのであらう。そのしみの爲めにこそ、われ／＼は苦しいでもいゝ事に苦しみ、悲しいでもいゝことに悲しんでゐるのではないだらうか。

老妻の生花ばかりではない。わたしは、まだ初身の人たちの弓を引くの見、また巧者とか名手とか云はれる人の弓を見ていつも同じやうなものを感ずる。わたしは多くの場合、いはゆる弓の名手の弓から、何者をも感ぜぬ場合が多く、むしろ初身の人々の弓から、強く教へられ、迫るものを身に受ける。少しの毒氣も入つてゐないからであらう。

老妻の木瓜も、なまじ、花を生ける氣がなかつたならば、もつと、自然の中にとけ込むやうなものが出来るのかも知れない。わたしは、え、いつかまだ娘たちがみんな家にゐる時で、お天氣のいい日に多摩の飛田久の停留場から、武蔵野を調布の石田村の方へ行つた事があるではないか、あの時に道ばたに澤山木瓜が咲いてゐた、あの氣持がその生花にあればいいのだらうねといふ。

さやうで御座います、あの氣持が失くならぬやうに、そしてまた生花としての赴きが、一輪一輪からにじみ出るやうに、然様參ればいいのでございますが。老妻は、とう／＼閉口したか、鉢も枝も其處へ置いて終つた。

人生がむづかしいやうに花もむづかしいものらしい。毒にしまぬ人生、毒にしまぬ生花、そんな事が出来たら、どんなに世の中が、すが／＼と穏かで、それとまた同じやうな、ほんとうの美しい生花を見ることが出来るだらうか。

二

ことしの冬は、あんなに度々雪も降り、寒さも殊の外にきびしかつた。わたしは、風邪のために親しい友人二人を失つた。神戸にゐる次女は三年前の大病この方餘りに丈夫とは云へないので、その度に、風邪には本當に氣をつけるようにと申送つたが、娘は、それ

はこちらでおとう様おか様に申上る事で、こちらは元氣で隣組の世話役などもつとめ、防空演習なども決して人様には敗けないやう働いて居りますから御安心下さい、いろ／＼と不足もございしますがその不足が却つて、藥になりますものと見えて、主人もわたくしも體量も殖えました。それに神戸は暖かですといふ返事をくれた。

青森の大森にゐる長女は、少しの休みを利用して、主人と共に、子供をつれてやつて來た。そして東京の寒いには驚きました、あちらなどは寒いと思つた事などはございません、第一赤ん坊もまだ一度も風邪を引きませんといふ。そうかも知れない、赤ん坊は丸々と肥つてきや／＼いつてゐる。ことしは赤ちゃん大會に出すのだといつて大そうな元氣である。

わたしがこの赤ん坊を抱いて、縁側で日向ぼつこをしてゐると、長男がいつの間にか寫眞をうつした。そして、それを神戸の姉へ送るのを見たら、寫眞の裏に、おやぢ斯くも老えり、孫抱くの圖と書いてあつた。

この長男も、ことしの秋は學校を出て兵隊である。一兩日の中に、東京を出發して、伊勢神宮へお詣りをし、それから樺原神宮へ廻り、神戸で姉に逢つて來る事にしてゐるやうだ。淋しいが、兵隊の味を知らぬおやぢに代つて、みつちりと御奉公をしてくれるやう祈つてゐる。



むかし、鎌倉に父母兄妹も妻子もない、廣い世界にたゞひとりぼつちの若者がゐました、この若者にはきまつた家さへありませんでしたので、数少い友達や知合ひのところを轉々としてゐましたが、やがてそれらの人々にも飽きられてしまひ、いよいよ今日の身の置場に窮する破目になりました。それといふのは、この若者はとり立てて才能はありませんでしたけれど、至つて正直で他人の手傳ひ

一本の葉

佐賀 一海

斷きにもつて來いの男でしたが、どうも性質が陰氣すぎるのと、運わるな目にぶつかるやうにばかりできてゐたからです。或家では彼はせつせつと水汲みの仕事をしました。すると或日、彼のいつも水を汲みに来る井戸の傍らで遊んでゐた主家の子供が、彼の姿を認めるといきなり彼に蹴むれかゝつて來ました。が、除けようとして横に振つた彼の撥ひ桶に突きとばされて井戸に落ちてしまひました。彼が一所懸命になつて子供を井戸から救ひあげたときは、もうすでに遅かつたのでした。また或家では、彼の仕事の割當ては桶の火を起すことでしたが、或朝仕事場に來て彼の傍らに踏みこんだ主人の眼に火の粉のとばつち

りが入つて、たうとう主人は片眼を失ふやうな結果となつてしまつたのでした。かういふわけで彼のあらはれるところには、きつと何かしらの不幸が待ちかまへてゐるといふやうになりましたので、彼自身べつにわるい行ひもしないのに人々は彼を遠ざけて行きました。彼は無口で、それらに對しても云ひわけらしいものも考へたことなく、たゞ自分自身の運のなさを嘆くだけでした。しかしもうその日その日をどう暮してゆけるかも分らなくなつてしまひましたので、彼はいつそ死んだはうがましだと考へて來ました。そこで長谷寺にまゐりまして、観音のみまへで手を合せてこんなことをお頼みしました。私はこの世

の中^{うち}にたつたひとりぼつち投げだされまし
た。誰も私^{わたし}をかまつてくれません、私^{わたし}のする
ことは全部^{ぜんぶ}他人^{たにん}の迷惑^{めいわく}に
なるばかりだからなので
す。この世^よに望^{のぞ}みを失^うつ
た者^{もの}をあはれとお思^{おも}ひに
なり、よき後生^{ごせい}の得^えられ
ますやう、どうかこのみ
まへであの世^よへのお導^{みちび}き
をおねがひいたします。」

彼は堂前^{だうまへ}に俯^ふしたま
ま、死ぬまで一步も動^{うご}か
ぬつもりで祈願^{きがん}しつづけ
ました。かうして一日^{いちにち}、
二日^{ふたにち}と経^たちました。とこ
ろで、この浮浪人^{うらんじん}らしい
様^{よう}子の男^{おとこ}が本堂^{ほんだう}の真ん前^{まんなまへ}
に頭張^{くづは}つたきりどこへも
出^でて行く氣配^{けいはい}のないの

に、寺^{てら}の僧達^{そうたつ}は大評定^{だいへうてい}をひらきました。とに
かく困^こつた。何も喰^くふ様^{よう}子^しもないし、あのま
とこに行^いきまして、

ま師死^{しし}でもされたら寺^{てら}のけがれになる、一刻^{いこく}
も早^{はや}く追^おひ立^たてるほかはない。」みんなの意見^{いけん}



がさうきまりましたので、僧^{そう}の一人^{ひとり}が若者^{わかしよ}の
ところに行^いきまして、

「大事^{おほいごと}にならぬうち寺^{てら}を出^でて行きなさい。こ
こで死^しなれたら大迷惑^{だいめいわく}だ。」と怒鳴^{どな}りつけまし
た。すると若者^{わかしよ}はか細^{かさい}い聲^{こゑ}で自分^{自分}の身^みの上^{うへ}を
僧^{そう}に話^{はな}し、「かういふ頼^{たの}りない身^みはもう佛^{ほとけ}を頼^{たの}
むほかないのです。私^{わたし}は生死^{せいし}を佛^{ほとけ}にお委^{まか}せ
いたしました。どうぞこのまゝにして置^おいて下^{くだ}
さい。」と云^いひました。はじめ意氣^{いき}込んでゐた
僧^{そう}も、このまじめさうな若者^{わかしよ}のあはれた身^みの
上^{うへ}を知^しるとそゝろに同情^{どうじやう}の念^{ねん}が湧^わいてまゐり
ました。それで他の僧^{そう}達^{たつ}と再び評定^{へうてい}して、兎
に角^{すくなく}難^{がた}有^あい佛^{ほとけ}のお告^つげが若者^{わかしよ}の行^いく手^てを照^てす
まで寺^{てら}で食^くべ物を施^しさうといふことになりま
した。そこで僧^{そう}達^{たつ}は交^かるがはるこの若者^{わかしよ}に物
を食^くはせていたはりました。彼^{かれ}もよろこんで
それを受^うけました。

さて、若者^{わかしよ}は堂前^{だうまへ}で祈願^{きがん}をつづけること、
三七日^{さんじふにち}になりました。その明^あけ方^{かた}のまどろみ
の夢^{ゆめ}に、御帳^{ごちやう}から光^{ひかり}かやくみ姿^{すがた}が立ちあ
らはれて、

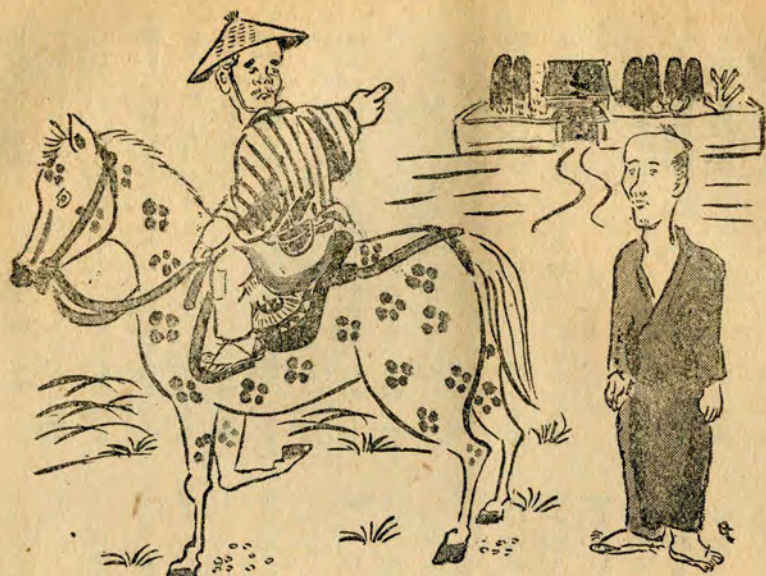
「この男前^{おんなまへ}世^よの罪^{つみ}の報^はいも知^しらず、われをか
こつとは不當^{ふたう}である、しかし申^ますことのあは

れによつていさゝかの事を計らふ。まづ速かに山門を出でよ。そのとき手に觸るるものあれば何であれ手に取つてそまつにするな、早く早く。」とお告げがありました。

若者は夢から覺めると、急に身をせき立てられるやうな感じがしましたので、現實に佛の力を心に植ゑつけたよろこびでその場から這ひ起きて出て行きました。ところが二十一日間坐りづめの若者にとつて、歩む力は八十の老人にも及ばなくなつてゐました。彼はよたよたと何度どころびかゝりながらやつと山門を出ましたが、その木の根に躓くと暫く起きあがることができませんでした。やつと起きあがつたとき、どういふわけか彼の右の掌には一本の薬が握られてゐました。彼はすぐに夢のお告げ、思ひだしました。それでそんなつまらないものも佛のたまふた物と信じた彼は、薬一本を永劫はなすまいと決心してまた歩きはじめました。朝の爽かな陽光が彼の行く手をさんさんと照してゐます。彼はその光の中でだんだん氣力を恢復して來まし

た。蛇が一匹、彼の顔のあたりをうるさくといまはつてゐました。あんまり煩いので木の枝を折つて打拂ひつづけましたが、どうしよりもないので彼はその蛇を手でつかまへると、さつきの薬で蛇の胴中をくぐりつけ、木の枝にぶらさげながら歩いて行きました。ところが、ちやうど向ふから貴人の長谷寺詣りでせう、立派な牛車の行列に出會ひました。牛車のひとつから、美しい装ひの稚兒がからだを乗りだすやうにしながら彼の手にしてゐる蛇を欲しがりました。日の光の中で、ぶんぶん羽を動かしまはしてゐる蛇が、きつと稚兒の好氣心を消き立たせたのでせう。彼は早速、自分の蛇を獻上し、その代償として蜜柑を三つもらひうけました。考へてみると、最初の薬一本が蜜柑三つになつたので彼としては大へんうれしいことでした。そこで彼は今度は三つの蜜柑を木の枝に括りつけながら歩いて行きました。するとまた向ふから供の侍を多く従へた高貴な女人が、やはりどこかの参詣への途すがらでせう、喉の乾けば水

をさがせ。」と消え入るやうな聲をしぼりながら徒歩でやつてまゐりました。供の侍どもはうろたへて水をさがしてゐるやうですが、あひにく近所には人家も井戸も見當りません。その侍の一人は彼を見ると、水のありかを訊ねましたが彼も返事のしようがありませんでした。しかし事情が分つてみますと、彼は自分の手にしてゐる蜜柑を差出すことにいたしました。高貴な女人は大よろこびで彼の蜜柑をうけました。さうして彼に絹布を謝禮として與へたのでした。彼も蜜柑が人だすけになつたのを喜び、そのうへ得難い絹布を手に入れたうれしさで元氣數倍して尙も道をすゝんで行きました。さてその日は暮れましたので、通りすがりの人家の軒端に寝かしてもらひ、翌る朝は鳥とともに起きてやはり當てのない歩みをつづけて行きましたが、やがて向ふから立派な白馬に乗つて來る武士と出會ひました。と、急に彼の眼のまへでその馬がぼつたり倒れてしまひました。武士は狼狽して愛馬の介抱にかゝりましたが、どうした



ものか馬はそのまゝ息を吹返しませんでした。あゝ、自分の財寶のすべてが失はれた。」

かう嘆きながら武士はいつまでも愛馬のそばから離れようとはしませんでした。彼も行き合ひの縁から何か武士を慰めることはいかないかと思案しました。

彼のできることは自分のもつてゐる絹布を武士に差出して馬を

畑中俊應著

ビルマ遊記

B 6 版七百六十餘頁寫眞數十葉クロス装 箱入

佛教國ビルマに遊び久しく彼等と共に住んだ著者がビルマの一般風俗、信仰の内、狀を紹介するため、かつて甲子社より出版せるもの。

今や英國の魔手から免れて大東亞共榮圈に馳せ参ぜんとするビルマを理解するに最も便利な好著

定價 三圓五十錢

本會々員に限り

特價三圓十五錢

(二割引)にて頒布す

送料十四錢

内容 ◇ビルマ雜觀 ◇彼等の信する佛陀 ◇彼等の信する涅槃への道 ◇ビルマ僧侶の現状 ◇ビルマ人の信仰の裏面

殘本僅少、お申込には「本會々員」と明記されたい

申込所

法然上人鑽仰會

御案内

四月二十日(月)午後六時から

本會誌友會を催します

小石川區大塚上町七西信寺にて

法然上人鑽仰會

山中にでも埋葬し、その菩提を懇ろに仰つてやることでした。それでそのことを武士に話しますと、その絹布さへあればまた他の馬を購へて面目を立てられやうと感謝で彼の申出をうけました。さうして、武士が絹布をもらひうけて立ち去つたあと、彼はひとりこの立派な白馬の骸をどう始末したらと考へめぐらしてゐましたが、不思議なことにこの白馬はふいにいなきを發して生き返つたのでした。彼はびつくりしてとびのきました。馬は起きあがるとさもなくさうに彼のからだに鼻をすりつけるやうに近よつて來ます。彼はこの白馬が、やはり佛の彼への授りものだと、そのときしみじみ感ぜずにはゐられませんでした。

彼はいまやひとり歩きではなくなりまして、立派な白馬に跨つて、はるばる京の都への旅路を辿る彼でした。彼はさまざま苦難を嘗めながらも、どうか彼も馬も達者で琵琶湖の見える膳所の在までやつてまゐりました。すると後ろから彼を呼びとめる聲がかゝりました。振り向くと、草鞋脚絆に身を固めた一人の百姓が息せき切つて追ひ纏つて來ます。京に急用があつて行く者だが、もしおいそぎでない道ならば、わしにあなたの馬を貸さぬか。かう百姓は申し出て、更につづけた。わしはこの在の者だが、田畑も三丁づつはあります。あなたの馬を拜借中はあなたが内に入つてお暮しなさるは勝手です。もし萬一、わしが京に行つたまま戻らぬ場合はあなたが内の主人になることを約束しませう。若者は云はれるまゝに馬を百姓に貸したへました。さうしてこれも佛の指圖にちがひないのだらうと考へました。彼はその百姓の家に暫くとゐることにになりました。家には家族といつてないやうでしたが、食物はたくさんあるし、それに近所から手傳ひの者が通ひで來てゐるらしく、すっかり安心をきめこんで主人の留守のまもりをすることになりました。さて彼から馬を借りて京へのぼつた主人は、五日経つても十日すぎても戻つて來ませんでした。そこで彼もいつまで坐して食し

てもつまらなくなりましたので、やがて他の手傳ひの者達と農の仕事につとめはじめました。成程、畑に出てみて氣づいたのは、あの主人が云つたやうにこゝは裕福な農家であつたことでした。彼は主人のゐない間、その主人の持物をすこしでも傷けてはならないと思ひましたので、朝早くから働きました。こゝで働くのも佛縁だと思ふと、働くことがだんだん面白くなつて來ました。ふしぎなことに、以前彼が働くところには必ず不幸や不運が附纏つたのに、こんどは仕合せなことばかりがつづくやうになりました。かうして半年経ちました。主人や馬はまだ歸つて來ませんでした。いつか一年すぎてゐました。この家の田畑の收穫は去年の倍だと手傳ひの者が云ひました。彼はそれにすっかり自信を得て、更に懸命な努力をつづけました。主人のゐない間のかはりが、何年経つてもかへらない主人の身に、いまは彼自身がなつてゐました。若者はいつか若さを失ひましたが、その近在で知らぬ者となつてない奇篤者になりました。



宗教報國全國 大會に出席して

醫學博士 和田正系

是くも官戰の大詔を賜つたこの感激深き第二回の奉戴日を期して、神佛基各教派、各宗派各教團が合同主催となつて、文部省、情報局、大政黨餐會の後援の下に、宗教報國全國大會が東京九段の軍人會館で開催された。

參加者は佛教八百人、神道四百人、基督教三百人合計千五百人である。尙、各宗各派にはそれぞれこの人員を割當てられて、我が淨土宗には八十五人、その内三分の一は信徒代表を以て當て、主として青年會から出ること

になつてゐた。關東は勿論、遠く奥羽、關西からも馳せ參じた人もあつた。當日は私もその末席を汚して意義深い一日を送らせていただいた。

以下は備忘の爲めに書いておいた日記の一節である。

昨日まで稍暖かであつた氣温はこの朝急に下つた。

まだ薄暗い田舎道を停車場に急げば耳を切るやうな北風が吹き荒む。土手の電柱には電線が切れそうに唸り、田圃には張りつめた氷が曉方の薄明りに冷く光る。停車場に着くと漸く夜が明けはなれた。

雪催ひの冷い東京灣に沿つて汽車は北へ北へと走る。今日はいつもの東京行とは少し違ふのである。いやしくも宗教報國大會に出席するのである。そう思つて私は携へて來た

「聖德太子十七條憲法」の註釋書を改めて拜讀することにした。

簡古な太子の御言葉は、一々、緊々と胸に泌み込むのであつた。私は溢れ来る感激に風々巻を閉ぢた。内憂外患、實に建國以來の國難のたゞ中に立たれた聖德太子の、あの千三年の昔を今に比べて見た。

飛鳥の里、いかるがの宮のほとりを彷徨つてゐた私は、時々鋭い汽笛に幻影を破られた。

兩國のプラットホームではラウドスピーカーが頻りに「今日は奉戴日でございます。お互に一層の御奉公を誓ひませう……」と叫んで居る。電車には國旗が翻翻とひるがへり、市街にはもんべ姿の婦人の一團が整列して班長らしい人から何か訓示を受けて居る。

すべては肅然たる奉戴日の朝の光景である。

大門を落り増上寺の大きな三門を右手に眺めて明照會館に着いた。このあたり御臨高閣

に老樹蒼蒼と朝の空氣は一入森嚴なるを覺えさせる。

宗務所には既に大勢集つて居られた。大會は午後二時であるが、その前に宗門關係の人は一旦宗務所に參集して打合せ等ある筈である。暖爐や火鉢には全國から來られた代表者達が三々伍々語り合つて居られるが、見渡せばその多くは僧形で、我等の如き俗人は少い。午前十時を過ぐる四十分、一同大廣間の定められた席に着く。

やがて管長郁芳隨園親下は紫の衣に威儀を正して靜々と會場にはいつて來られた。一同は起立して恭しく先づ宮城を遙拜し次でピアノに合せて國歌を合唱する。郁芳管長は徐ろに壇上に登られて嚴かに宣戰の大詔を捧讀せられた。

私は臉が熱くなつて涙がこみ上げて來た。

管長親下を初め、全國の代表者、僧俗共に茲に一堂に會して宮城を遙拜し君が代を合唱する。洋服あり、和服あり、國民服あり、嬰孩をかけたるあり、數珠を持てるあり、持たざるあり、その外形より云へば實に雜多、然も佛壇には古風豊かなる蠟燭の光れるに、ピアノに合せて合唱する。前に形は雜然たる如く見へて實は不思議にも渾然として一體なのである。

國民儀禮が終ると一同着席して動行を行ふ。平生無難作に唱へる彌益文も四弘誓願もこの非常の時、特別な光明と無限の意味とを放てることを汲みと感した。

管長より御挨拶を兼ねてこの大東亞戰時下に於ける淨土教徒の心構えに就いて御垂示あり、次いで里見會長、江藤部長より本日の宗教報國大會開催に關する経過報告及び注意等があつて午前の豫定は終了した。

晝食を済まして會場たる九段の軍人會館に急ぐ。電車は満員である。ふと見る濠端には銃を肩にした大學生の一隊、又一隊、校旗を先頭にして肅然と行進して居る。九段の附近では流石に軍人の姿が多い。隊列を組んで行進し來るもの、數人一團のもの、個々のも

の、その間に混つて、武裝せる學生隊の幾組、更に女學生の大行列も蛇々と坂を登つて行くのが見える。

今日は午前中、學生報國隊の大會もあつた筈である街頭は正に軍國非常時の繪巻物である。

定刻には未だ一時間近くもあらうと云ふのに會場は既に七八分の入りのである。二階の正面に席を見付けて先づひと休みする。神佛基各宗各派全國代表の集合とて見渡す會場の人々の姿、各種各様であるが、然しそこには普通の集會と違つた一種特別の雰圍氣がかもされてゐる。

和服、洋服、フロック、國民服、紋付、僧服、牧師姿、白髪、光頭、〇〇報國團といふ赤い腕章物々しい出立、幅廣い白地の襟に宗團の名を大きく染め出したもの、その間を係員らしい人々が右に往き左に走つて居る。一切は雜然たる騒動である。

いつの間にか會場は隙間なく人で埋つて了つた。定刻になると同時に電鈴は急に開會を

報した。今迄うごめて居た人々の姿は忽ち静まつて、みな舞臺を見つめてゐる。

織帳が音も無く捲きあげられると、まばゆい程明るい舞臺が其處にあらはれた。正面には大國旗を垂らし、その前に演壇がある。日の丸の右手には橋田文部大臣を先頭に奥村情報局長その他政府筋の顯官が並び、左手には浄土宗郁芳管長を先頭に各宗管長がずらりと並んで居られる。頗る壯觀である。

やがて一同起立、敬禮の後國民儀禮に移る。

宮城遙拜があり、一同水を打つたやうな静寂と緊張との内に豫定が進められて行つた。宣戰の大詔は木邊孝慈男が捧讀せられた。新しい桐の箱の蓋が固くて中々開かないのには心配した。

次で主催者を代表して基督教の阿部義宗氏が式辭を述べられる。その口調が如何にも牧師のお説教の様であるのはあらそはれぬものと感心した。

橋田文部大臣は懐しい白髮童顔に凜然たる

音調を以て譚々と現下日本帝國の宗教家並びに信徒に對し皇國宗教の本質を説かれその方向を誤らぬ様戒められ、宗教家は國民が眞に皇運を扶翼し奉る底力を培養し得る様指導し、國民に先立つて實踐躬行すべきを激勵されたのである。

奥村情報局長は例の如く卓を叩いて熱辯を振はれた。その熱辯中注意すべきは日本國民は誰もが盡忠報國の誠心を生れながらにして持つてゐるのである。但その誠は時として種々な障碍によつて曇らされる。この鏡の塵を拂ひ除くこそ宗教家の任務であるといふ一言であると思つた。

次で大政翼賛會事務總長の挨拶代讀終つて、基督教代表の富田滿氏を座長に推して陸海軍將兵への感謝決議を爲し、天台宗總務大森亮順氏その決議文を朗讀される。

更に神道側代表神智教の新田邦達氏力強き宣誓文を朗讀し滿堂の拍手を浴びる。

最後に宗教界を代表して本大會參集の最高齡者日蓮宗管長酒井日慎大僧正は八十八歳の

曲つた腰を中央演壇に運ばれ聖壽萬歳を奉唱、滿場之に和して今日の大會を嚴かに終つたのであつた。

冬の日影は既に傾いてゐた。私は熱した頬を吹く北風を却つて心よく思ひながら人波にもまれつゝ電車通りを歩いて行つた。

私は朝から聞いた、いろいろの人達の話を頭の中にくり返しては味つて見た。

宗教報國全國大會。

神佛基三教の全國代表者が一堂に集つてこの大詔奉戴の感激深き日に、一致團結、宗教報國の決意を固める。まことに空前の一大盛事に相違ない。

然し私はこの大會に何となく一抹の物足り無さを感じた。それは何故だらうか。それは宗教家、少くも宗教關係の人から火の如き愛國愛國捨身報國の熱辯が聞かれなかつたことであつた。三教合同ではさういふ事もなかなか困難な事であるかも知れない。

けれども宗教に何よりも大切なのは燃える如き熱情ではないだらうか。よし表面は水の

如き静けさであつても、内面には國を愛ひ人を愛する焰の如き情熱が燃えてゐなくてはならない。形式はむしろ如何でも宜しい。少しい位の股線があつても異論があつても構はない。要は國家や人生に對する潑刺たる情熱が第一問題ではないだらうか。

熱情の無い宗教は死したる宗教である。私は何となく淋しかった。私は、今朝一緒に同道する約束であつた淨土宗青年會代表氏の突發的不幸を想ひ起して痛ましい心持になつてゐた。今日の大會に同道を榮しんでゐたこの山村の友、T氏は昨日

突然病院から電話をかけて來て愛兒が火傷の爲め急に亡くなつて明日は上京出來無いと知らせたのであつた。スチムも通らない夜汽車の隅にふるへながら私は私の心の熱情をしづかに掻き立てゝゐた。

陸海軍病院慰問淨土

寄附者芳名(敬稱略)

三圓六十錢
十圓

樺太野田町慈光寺拔
樺太泊居町三緣寺拔
佐藤靈祥
坂本坂吉
俵谷スエ

成田正太郎

白濱ヨイ

長谷川平太郎

北村みわ

眞光左京

田中リシ

高橋福尾

永井すず

和田乘眞

辻英民

樺太敷香町保惠
大阪府三島郡島飼村

一圓二十錢
一圓二十錢

二圓
一圓二十錢
一圓
十二圓
一圓二十錢
一圓二十錢
一圓二十錢
一圓二十錢
一圓二十錢
一圓二十錢
十圓
十圓
十圓
一圓二十錢
圓

東京市王子區上十條三丁目 唐美寺

茨城縣稻敷郡阿見村阿見 加藤登志

大牟田市曙町十七淨心院內 井村正喜

金澤市豐國町了願寺中 六波羅婦人會

北海道宗谷郡猿拂村演鬼 神たけ子

同 鈴木初枝子

同 木村春江

天津明石街知恩院別院 瀧澤孝道

同 安部觀道

天津日界宮島街 森川きん子

樺太敷香町東一條北一丁目源空寺拔

豐橋市花田町大塚一七八 蛭子省一

佐賀縣三養基郡北茂安村千栗 牧平良信

高知縣土佐郡本川村長澤 大法寺

兵庫縣芦屋市打出内田五 河内源次

池田吉兵衛

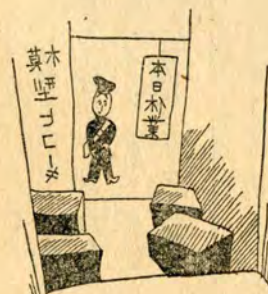
國協畫漫

淨士マグン部隊



いつも満員のバスに
乗つてゐる男でした
『だ旦那中へ入つて下さいよ
走りますぞ』

習慣 和田かつち



胎教の爲
一日店を休みました。

長期戦



山崎善一



戦う日の
マレー戦線



洗たく
がすま
した。



鯉の背
中の
使ひ
よさ！



川口久

南の兄さんへ

川 口 久

「おぢいさん
あのデカイ
うちわ送つて
あげたいネ」

落下傘部隊教育

山崎 善一

「アナターツ
お客さんが待つて
ゐますヨ」
「修繕は
明日〜」



急 患 者
同じ町内に小児科の
先生が二人おりました……

それ
行け！

今度こそ
あいっ
より先に

奇生！

あつ！
しま
ったッ

また
忘れ物だア

とんだ
むだあし

和田かつち



信仰相談

(質問歡迎)

擔 中 村 辨 康

臨終の時何うすればよいか

(問)

臨終行儀について簡単に教へ願ひます。實は私の父が先日死なういたしました、大變苦しみしたので念佛も出來ず、また傍でさゝめることさへ出來ませんでした。もう戻らぬことではありますが、他の方々の爲にも知つて置きたうございますから。

(答)

(青森・北津輕・小泊・小柳亮信)

臨終行儀に就いては淨土宗讀本にかなり委しく書いて置きましたからそれを見て頂きたいと存じますが、御實ねのやうな「苦しみ」に閉ざされて居る場合には、恐らく傍のものが「お念佛」をさゝめても御本人としては受ふ付けるだけの餘裕がないでせうと思はれます。御實ねが餘りに簡單

なのでその時の實情がよく分りませんが、御想像申上げれば平素あまりお念佛をなさつて居なかつたのではないでせうか。若し多少なりともなさつて居られたとすれば、失禮ながらその御信仰はまだ／＼本當のところまで立ち至つて居なかつたのではないでせうか。若し本當に御信仰を持つて居られたならばもう少し何とかなつて居たと存じます。實は私も或る苦しにがれた臨終に際會したことがあります。その七轉八倒の際には全く手もつけれませんでしたが、私だけ一人靜かに念佛して居りました。若い頃の経験の無かつた時のことで、實は少しまごつきましたわけですが、またそれからのち老人の臨終に二三度會ひましたが、それは皆な同じやうにもう人事

不省で、唯だばげしい呼吸が續いて居りやがて嵐が止んで行くやうに靜かになつて息が絶えるのでした。かうした場合にも私は唯だ靜かに念佛をつゞけるだけでした。無論何れも平素信仰をもつて居ない方々ばかりでした。餘裕さへあれば來迎佛でも取り寄せて香華燈明を供へるとか、或はお佛壇の本尊様から五色の糸でも病人の手に握らせるとか色々方法もありましたでせうが、いつも死の直前でしたから少しも餘裕がありませんでした。病人の引く息に「南無阿彌陀佛」とこちらの息を吹き入れるやうにするのがよいとも教へられて居りますが、病氣に依つてはそれの出來兼ねる場合もあります。かゝる時靜かに念佛するより外に手段はないやうです。但し此の場合大聲を出したり或は鳴りものを餘り鳴さぬ方がよろしいさうです。それから息を引き取つてからも一時間乃至二時間位は靜かに念佛して居たいものです。よく親族の方々が死骸に取りついて泣き叫んだりいたしますが、そんなことは絶対にさせてはいけません。

ん。人情でどうしてもしたいなら、二三時間も経過してからのちにして貰うやうにすべきです。病室では死後と雖も若干時間は歩くに

佛前で柏手を打つてよいか

も音を立てないやう、話なぞもしないやう注意すべきです。

(問)

私の母はいつもお寺にお詣りしますとかしは手を打つてお辭儀いたします。私が注意いたしましたしても直してくれません。佛様の前で柏手を打つてもよろしいものでせうか。合掌とかしは手と何う違ふのでせうか。

(答)

(英城・北相馬・取手・鈴木豊子)
私も委しいことは存じませんが、かしは手も合掌も宗教的に見てさう大した差異はないのではないかと思つて居ります。掌を合せること、若しくは十本の指



相 信

仰を組み合せることなど、私達が何かの感情を表現する時の自然の仕方であつて、

(問)

何う云ふ譯で神道では寺に居る人を嫌ふのでせうか。寺では死者を預

かみとほとけの問題

必ずしも後天的な取りきめ、賤ち宗團的約束ではないやうに思ひます。然し民族に依つて幾分の相異のあることは止むを得ないでせう。日本人はよく手を打つ習慣があります。何か思ひついた時など「あゝさうだ」と云ひながら思はず知らず手を打つことがあります。或は膝を「ボン」と叩くことなども度々あることですし、また何か恐縮した場合などにも、手をすることがありますが、それらは皆なかしは手又は合掌と同じもので自然の發露で

す。唯だ異なるところは拍手の場合は外面的な朗らかさを持つて居りますし、合掌の方は内面的に内に感情を秘めて居ると云つたやうな差異があるやうです。今では唯だ習慣的に神前では柏手を打ち佛前では合掌して居ります。が、感情の發露から自然に神前で合掌し、佛前で柏手を打つと云ふ、習慣と反對になる場合があつても差支へないでせう。とは云へ故意に世間の風習にさからつて、茶目氣分でやつて見たり又は「天の邪鬼」氣分でわざと逆なことをするのはよろしくありません。普通には素直に一般の風習に隨ふ方がよろしいと思ひます。貴女の場合ではお母さんに「世間並に一般の風習に隨ふやうに」とよく話して上げたらしよいでせう。おきゝ分けにならない筈はありません。

るからそれで縁起が悪いと云つて嫌ふのではないかと思ひます。私共の地方では神社

におまいりしてから寺に行きますのはよいが、寺にまいつてから神社に行くのを嫌つて居ります。一口に「神佛」と云ひますから神様の方を先にするのが本當ださうですが、さう云ふものでせうか。

二、眞宗は他力で淨土宗は自力だと云ふ人があります。私は法然上人も親鸞聖人も皆な他力本願であるが、阿彌陀如来様を信ずる人の心の方に、他力本願でなくて自他力本願になつて居るものがあるからだと思ひますが、それでよろしいでせうか。

(答)

(青森・東津輕・館平・丸尾久一)

昔神代時代は「衛生」と云ふことが宗教と結びついて居ましたので、

死人は「けがれ」として「しめなは」を張りその部分へは人々を入れないやうに致しました。それで一家の内誰か死にますと、その家を捨て、他へ移住したと云ふことです。死骸からはうじ虫が湧いたり臭氣が出たりして寄りつかなかつたからでせう。それに關聯して「血」と云ふものもやはり宗教に結びつ

いて「禁忌」とか「恐怖」とか云ふことから「穢穢」とか或は「尊敬」とか云ふ感情を持つやうになりました。それで注連繩などが張られたのですし、また死の原因である「病氣」を人格化してその「厄病神」を寄せつけない意味で注連繩を張つて「此の中に入るべからず」の表象としたのです。元としめなはは「けがれ」を境界する意味でしたが、今では「清淨」を境界して「けがれ」を入れないものに變化しました。此の意味から神社は淨域であつて「けがれ」を入れてはならないから「忌」のかゝつて居る人とか死者を取扱つた人とかを入れないことになり、職業的に葬儀を取り行ふ僧侶をも嫌ふことになりました。

た。それともう一つは神道家の中で謂ゆる「復古神道」と云はれる一派は排他的でありましたが、それが段々盛んになつて遂に明治初年の神佛分離から排佛棄釋になつて極端に佛教及び僧侶を嫌ふことになつたこともその大きな原因の一つです。

次に「神佛」の順位の問題ですが、一口に

「神佛」と申しますけれども、實は「神佛」と一處にくつつ



けて云ふのは國民感情から來て居るもので、本質的には全然異なるものですから、位はないわけです。即ち「かみ」は「上」または「貴き人」を意味し（かは美稱みは身）上のことやものを「かみ」と申したのです。例へば兄のことを「子の」と云ひ、頭髮のことを「かみ」と云ひ、皇居のことを「かみ」と云ひ、その地方を「かみ方」と云ひ、殿様や高貴の方に「おかみ」と云ふ類です。それに「神」の字を當てたのは單なる當字であつて支那の「神」の意味ではありません。支那の「神」は「惡神」であつて「鬼」と同じ意味です。だから基督教は日本では「神」と云ふ言葉を使ひますが、支那では絶対に使ひません。若し「神」と云ふ字を使ふと尊敬するに、値ひしないものにされてしまひます。ですから支那では基督教の神を「天」と云つて居ります。次ぎに

相 信



談 仰

ことです。随つて歴史上に存在された神々であつて、基督教

「ほとけ」とは「浮圖家」即ち「佛陀家」のなまつたものと云ふことですが（家は神道家とか社家とか寺家とか云ふ家と同じ）國民感情から云ひますと「ほどける」の意味でつまり「解脱」したことです。これは日本的受入れ方として大いに注意すべき言葉です。然し「ほとけ」の本質は「覺醒」にあるのですから「かみ」と「ほとけ」とは本質的には一處にならることは妥當でありません。但し昔は本地垂迹説があつて「佛本神迹」のちには「神本佛末」となりました。

元來日本の「神様」は（一）、皇祖皇宗及びその御系統を御祠りした神社、（二）、國家の功勳者をお祠りした神社、（三）、地方郷土の開拓者をお祠りした神社、（四）、氏族の祖先即ち氏上をお祭した神社の四種に分けられます。國家の御祖先をお祭した内宮外宮の兩神宮は申上ぐるまでもないことです。随つて歴史上に存在された神々であつて、基督教

や回教等に云ふやうな抽象的な神とは全然相違して居ります。此の點をはずり認識して居ないと往々にして間違ふことがあります。あなたの仰つた神道が佛教を嫌ふ氣持は最初に申したやうに徳川時代の復古派から始まつたもので、昔は一處に仲よくなつて居たのです。それが明治以來極端に排他的になつて一時は佛教復興の氣運を見せましたけれどもまた／＼排佛的になり此の情勢はもつと強くなるものではないかとも思はれましたが、この十二月八日の大東亞戰爭勃發と共に、凡ては一變して皆んなが打つて一丸となつてそれ／＼の部門を擔當しそれ／＼の職域を通して御奉公すべきであつて、そんな兄弟喧嘩などして居る際でないことが痛感されるやうになり、排他的氣分を持つものは却つて

非國家的だと思はれるやうになりました。中には從來の情勢でまだ反省しない人も若干はありますが、もう時代は大きく轉換したのです。お互ひに仲よ／＼して一致協力しつかりやらなければならなくなつたのです。もう島國根性はゆるされません。問題の問題とすべきはしつかりやるかやらないかにあるのです。つまり總力を集めて最後までやりぬくことに第一義が置かれて居るからです。第二の問題は仰せの通りで結構でございます。

法然佛教とわが國體思想

神國日本の教法として開創された法然佛教を歴史的に解明して餘りなし。

價二圓二十錢
送料十錢
會員に限り
送料當方負擔

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館
振替東京 八二一八七

文島文理科大學教授
山本幹夫著

淨 土 隣 組 座 談 會



資源を得て持てる國

座長 シンガポールが陥落して昭

丁造 全くいまの戦争は難しいも

れば時代からとり残されてやせる

したよ。

南島が誕生しました。お互

ひにお目出度う御座あます

乙郎 昭南島に凱歌があが

つて、一億の決意はいよいよ

固し。

丙子 最後のとどめを刺す

日まで追め貫けですわね。

丁造 よくまあおとしたも

のぢや。

戊枝 あの時はわたしらま

でが何かこう重荷をおろし

たやうでしたよ。

甲雄 昭南島の発展こそ大

したものです。山下指揮官

の下に行政機關まで決りましたな

のぢやね。いくら日露の勇士であ

つてもとんと判らんわい。

乙郎 何しろ戦ひながら肥えるの

だから難しいわけですよ。昔の戦

争と違つて今の戦争は進めば進む

程、基礎がしつかりして来るやう

にするのです。

座長 アメリカあたりで戦争を消

耗戦だと云ふのは、今まで持てる

國だと意張つてゐたのが段々消耗

してゆく一方だからでせう。お氣

の毒みたいですよ。

戊枝 だけどわたしは近頃随分や

せてしまつて心細いですがね。

丁造 それはお婆さんの心掛けが

悪いからぢや。一寸でも油斷をす

は、南米のテニス選手權大

會がボールがなくて中止になりま

したよ。

ひおつたよ。

丙子 まあ無理だわね。

丁造 ところがそれが出来るのだ

から不思議ぢや。それと同じで今

では身體の方を時勢に合はせなく

てはならん。

甲雄 スマトラやバンカ島だけで

も石油、ゴム、錫等の戦争になく

てならぬものが無盡蔵にあるさう

ですわね。

座長 それらを開發してゆく日本

こそ十年が二十年でも戦争が續け

られるわけでせう。

乙郎 日本の兒童は南方からゴム

まりがといて大喜びしてゐると

いふのに、南米のテニス選手權大

會がボールがなくて中止になりま

したよ。

九十九里を半ばとす

甲雄 重慶で日本のことを不敗の地位にあるといつてゐますが、何故早く謝らなないのでせうね。

丁造 ものごとはさう急いでも駄目ですわい。作の手紙にも「前線にゐると

戦ひはこれからであることが實感されます」と書いてあつたが作にしてみれば、まだ序の幕を終つたところらしいな。

座長 首相の演説に「大東亞戦争はやうやくその第一歩を踏み出したに過ぎない。古來百里の道を行

くものは九十九里を以て半ばとす」と云つてゐます。

丙子 老大國の方では一日と衰弱してゆくばかりですわね。

丁造 老大國總身に智慧が廻りかねぢや。

甲雄 シンガポールで戦果だけで俘虜が八萬、大砲三百、戦車二百、自動車が一萬と、まあよくも狭い島の中に置き場所があつたものですな。

乙郎 空意張りも大きかつたが、敗つぶりも實に派手ですわね。何しろ難攻不落といはれた世界三大要塞でしたからね。

座長 いや皇軍の無敵ぶりもさる

ことながら、シンガポールが難なく陥ちたやうに思ふものがあつたらそれは間違ひでせう。赫々たる武勳のかけにはそれだけ御苦労も大きかつたと感謝しなくてはいいけません。昭南島はそれこそ文字通り血で得られたと云ふことです。

感激よりは
先づ感謝

甲雄 たしかに一朝一夕の計畫で出来るわけがありませんよ。

乙郎 落下傘部隊にしたつてロシアでこそ宣傳してゐたが皇軍にもあれ程の精銳が用意してあつたとは今まで聞いた事もなかつた。一日の

成功に感激するより長年の御苦労を思はなくてはいいけませんまい。特別攻撃隊には鬼神も泣きます。

丁造 例へばちや、鳥網にしたつて、鳥のかゝるの一日目に過ぎないが、その他に數知れぬ澤山の網の目があつてこそ一つの目に鳥がかゝるのと同じ理窟ぢやらうテ。



座長 東京市の銃後奉公會では慰問袋を大陸、向南方、海軍向の三つに分けて

年に二百萬個以上を送る計畫ださうです。

戊枝 丁造さんのところへも又送りませうよ。

丁造 餘りお禮を云ふと、催促のやうで何んぢやが、隣組で送つて下さつたのが餘程嬉しかつたとみえて、伴から手紙の度に皆さんに宜しくとありますぢや。

座長 この會が終つたら寄せ書をして先づ送りませう。

丙子 ボルネオの印度人が皇軍に二千ドル獻金しましたわね。外國人でさへそれですもの、私たちも張り切りませう。

名を秘密にするわけ

乙郎 話は違ふけれど、いつも皇軍の最高指揮官の名が秘密になつてゐるのは何う云ふわけでせう。

甲雄 敵に知られると困るからさ座長 その通りです。最高指揮官の名が初めから敵に知られてゐる

と困るのです。敵の方では普段から高級幹部については何んな性格の人か、また何んな癖や傾向があるのか調べてあつて、それで大きな作戦となると大體の傾向が判斷出来るよと云はれてゐます。だから戦争が一段落するまでは發表しないのでせう。

戊枝 なるほどね。南方の最高指揮官は寺内さんですね。

甲雄 寺内大將は大變信心深い人らしいですね。こんど出發するのにも心經と金剛經を天龍寺に納めて發つたとか、また北支にある時に嚴父元帥の戒名を短冊に記して回向したさうです。

丁造 さすがは偉い人は違ふものぢやナ。

不平は獅子心中の蟲

座長 皇軍は幾日間でも陣地に

んばり通してゐるのには英軍が舌を巻いて、とても敵對出来ないと思ひ鳴をあげたさうですね。きつと英軍では陣中でも三度の食事を缺かせないのでせう。乾パンをかじりかじり進軍する皇軍の敵ではないわけですよ。

丙子 ロンドンが獨逸の猛爆で苦しめられてゐた時に、地下鐵の中に籠城しながら三時のおやつに紅茶を飲んでゐる寫眞がありましたわね。

戊枝 さうさう、空襲だと云ふのに紅茶がなくては我慢の出来ないロンドンの人々は惨じめですね。こんな手数がかかるやうでは、何も出来ないでせうに。

甲雄 ぜい澤は敵獅子心中の蟲とはこのことだせう。

丁造 あまり他ごとのやうには云へませんぞ。わしらも不平不満を

口に吐き出さんやうにしくなくては。座長 その通りです。皇軍に困苦缺乏に耐へる驚くべき力のあるのは、平素から猛訓練してゐる賜物に外なりません。この點一般國民が訓練出來るとは云へますまい。

丁造 皇軍の素晴らしい戦果に感心ばかりしてゐて、自分達は一向に困苦缺乏に耐へぬやうではなにもならん。

思ひ切り空地を利用

乙郎 食ひ物と何やらの惜みは恐ろしいと云ひますからね、戦時下の食糧問題は重要でせう。

甲雄 シンガポールの陥ちた原因の一つに英軍の食糧數ヶ月分を貯藏した食糧倉庫を皇軍に占領され

たことが挙げられてゐますよ。丙子 都會は食べる一方だから尚

難しいわけね。

乙郎 こんど大都市には都市蔬菜
自給圏なるものを作つて、その都
市に必要な野菜の八割を供給する
のだからですが、こうなると

尙空地の利用も思ひ切り有効
にやらないと間に合ひません
戊枝 昨年は大部失敗しまし
たよ。馬鈴薯なんかは木ばか
り大きく育ててしまつて、か
んじんのいもの方が小さくて
食べられませんでした。肥の
やり方一つ知らないで作らう
といふのは土臺無理ですよ。

英字の抹殺運動

座長 英字抹殺運動といふのが香
港にあるさうですね。看板等もす
っかりアジア色に塗りかへたとか
云ひます。

丁造 香港やフィリッピンで英字

を使つてをつたのは當り前ぢやら
うが、わが國の看板や廣告に英字
を使つてゐたのは勝におちないこ



とぢや。

戊枝 わたしにはまるで讀めませ
んのね。婆さんには關係ないの
かも知れませんが讀めない廣
告なんて値うちがあるのでせうか

乙郎 やたらに外字を使ひたがる
のは、わが國の文字を輕んずる輩
のすることですね。

丁造 讀めないものを使ふ位なら
唐草模様をつけた方が餘程飾りに
なるといふものですわい。

甲雄 床屋の店先きに英語でヘッ
ドカツテングと書いてあつたとか
云ふのですが、これでは頭を斷る
商賣といふ意味ですからね。實に
物すごいことです。

座長 これからは日本自身が東亞
の指導者として相應しい姿になら
なくてはならないのに、こんな根
性ではいけません。

戦へる老婆の幸せ

乙郎 わが潜水艦が米本土を砲撃
しましたな。

丙子 偉いものですわね。ニュー
ヨークカワシントンを猛爆してや

りたいものですわ。

甲雄 その報復に南島島を空襲し
て來ましたが、わが本土から二千
キロも離れ、周圍十三キロしか
ない小島に卅機も來るなんて米國も
案外臆病だな。

戊枝 あの時初めて空襲報が發
せられたでしよ。すつかり緊張し
て張り合ひがありましたよ。

座長 お婆さんが一番早かつた。

戊枝 空襲でもなければ、わたし
の働けることがないのですもの
ね、これから空襲の時には孫の守
りは嫁に委せることに決めまし
た。警報が解除されても身體中に
何んだか力が入つてゐて、ほんと
嬉しかつたですよ。

丁造 空襲のある度に、婆さんこ
ごどとばかり若返りですわい。



歎 佛 偈 講 義……………

仰ぐ光に誓ひは固し

大野 法道

一

日本は今、開闢已來未だ曾て見なかつた程の極りなき榮譽に輝いてゐる。われ／＼日本人は二月十八日、戦捷第一次祝賀日の正午に、東條首相の言葉のまゝに「天地も揺げとばかり」天皇陛下萬歳を三唱した。正に「生けるしるしあり」との底しれぬ感激を湧き上らせてゐる。

まことに云ふに言葉なく、喩ふるに物なき歡喜の頂上に達した。

この大東亞戦争の今日までの戦捷が齎らした國の榮光と人の感激は、地球のもつ歴史上には、いつどこにも未だ顯はれ出たことのない、驚くべきものであるからである。舊臘八日の宣戰の大詔を拜して、即座に布哇眞珠灣にて米艦

の主力を屠り、翌々日馬來沖にて英の誇りとする豪艦ブリス・オブ・ウエールス號及びレパルス號を轟沈し、二十五日の香港陷落、新年三日のマニラ陷落と相次ぐ戦果の輝かしさ、それに加へて世界屈指の要塞であり、東亞制肘の無二の有利な據點として、過去百年の暴勢を恣にした牙城のシンガポールへは紀元節の佳き日に突入し、早くも七日目にその陷落を見るといふ、實に人間わざでは得らるべくもない大捷である。しかもそれは單なる大捷ではなく、開戦前の緊迫した有様、國の大きさと物の多さと機械力とを何よりの恃みとし、日本の眞意を解せず、實力を知らず、經濟封鎖を以て挑み來り、A B C Dの據點を固めて事あらば、すぐにも襲ひかゝらんとした實狀は、この大捷によつて全く逆轉し、彼我の位置は顛倒して、東亞に於ける米英

は、取る手と立つ足をもぎ取られてしまつたのであり、聖戰の目指す大東亞共榮國の基礎がこゝに確立したのであるから、その意義の大きき深さは、思ひ計るに尙ほ及ばざるものがあるのである。

開戦已來わづかに七十日で、これ程の戦果を得た國は地上のどこにもなく、これ程の喜びを得た國民は、古來未曾有でなかつたのであるから、日本の國にこよなき光を仰ぐわれ／＼日本人の心が、今ほどはつきりと感じられる時はないのである。

二

仰ぐ光をもつことは人間最大の幸福である。本當に生きる尊い姿と強い力はこゝから出てくる。仰ぐ光を見ることが知らず、たゞ自分の身と心だけを見て小さく固まつてゐたのでは、徒らなる我見の突き合ひにうき身をやつし、人間に内在する強い力は出てこぬばかりか、物質欲に心を奪ひ取られて、わが身の生存が主になり、わが身を大切にすることに疲れてしまふ。

米英軍の力が足らず、皇軍の前にもろくも壊滅したり、無條件に降伏したりしてしまつたのも、由つて來るところ

は、かうした自分可愛いやの個人主義からである。かれらとても米國や英國などといふ國家の下にある國民である已上は、國の光を仰ぐことを知らぬものはない筈であるが、根が個人主義であるから、すべて自分本位で國を見てゐるのであらう。國民の一人々々が先づあつて各自の力で國のために盡すものと考へてゐるらしい。そこで力のあるだけは戦うが、もはやどうにもならぬ場合には、白旗掲げて軍門に降伏するも亦止むをえぬことゝしてゐる。かうした人々にあつては敵彈に當つて死ぬよりも、生きてゐて盡す方が幸であり國のためにもなるわけである。このやうな人々の集つた軍隊がどれ程の戦鬪力を振ひうるかは、それらの國々の戦争なら互格かもしれないが、わが皇軍の前には一たまりもなく撃滅されてしまふにきまつてゐる。わが無敵陸海空軍が顯はした戦果が、事實を以てそれを明らかに立證してゐる。本當に皇軍の征くところ、一切時一切處にそれを防礙しうるものはないのである。何故にかくも皇軍が強い力をもつてゐるのであらうか。

三

皇軍の強いのは御稜威の下に立つ「おほみいくさ」なる

が爲めである。云ひかへれば仰ぐ光をもつ日本人だからである。日本人の血管には祖先傳來の仰ぐ光に彩られた眞紅の血潮が流れてゐる。

仰ぐ光とは「御民われ」の自覺である。御國已外にわが身があるのではなく、わが身先づあつて而して後御國に盡す心を起すのでなく、御國とわが身一枚になつて、「醜の御楯」とさうげ盡すところに仰ぐ光が輝いてゐる。皇軍は一

光顔巍々

威神無極

(光顔巍々として威神極りなし)

如是焰明

無與等者

(是の如きの焰明は與に等しきものなし)

日月摩尼

珠光焰耀

(日月と摩尼珠の光は焰耀なるも)

皆悉隱蔽

猶如聚墨

(皆悉く隱蔽して猶ほ聚墨の如し)

如來容顏

超世無倫

(如來の容顏は世に超えて倫なし)

正覺大音

響流十方

(正覺の大音の響は十方に流る)

戒聞精進

三昧智慧

(戒・聞・精進・三昧・智慧)

威德無侶

殊勝希有

(威德侶なく殊勝希有なり)

深誦善念

諸佛法海

(深く誦かに善く諸佛の法海を念じ)

窮深盡奧

究其涯底

(深を窮め奧を盡して其涯底を究む)

人一人が自分だけの力で戦ふのではなく、仰ぐ光に御國を背負つて進んで征く。はやこの身はたゞの自分ではないから、戦死こそ御國に盡す全き姿であり最上の榮譽である。そこには個人主義などは影さへ割り込む餘地はない。かうした心から出る猛威は人間の力の最上無類のものであつて、こゝに無敵皇軍の世界に冠たる勇武があるのである。たゞに猛威ばかりでなく、戦場と銃後とを通じて聖戦目

※

無明欲怒

世尊永無

(無明と欲と怒と世尊は永くなし)

人雄師子

神德無量

(人雄・師子にして神德無量なり)

功勳廣大

智慧深妙

(功勳廣大にして智慧深妙なり)

光明威相

震動大千

(光明威相、大千を震動したまふ)

願我作佛

齊聖法王

(願はくば我れ作佛して聖法王に齊しく)

過度生死

靡不解脫

(生死を過度して解脱せずといふことなからん)

布施調意

戒忍精進

(布施調意・戒・忍・精進)

如是三昧

智慧爲上

(是の如く三昧と智慧とを上れたりとす)

吾誓得佛

普行此願

(吾れ誓ふ佛を得るまで普く此願を行じて)

一切恐懼

爲作大安

(一切の恐懼に爲めに大安を作さん)

假使有佛

百千億萬 (たとひ佛ありて百千億萬)

無量大聖

數如恒沙 (無量にして數恒沙の如くならんに)

供養一切

斯等諸佛 (一切のこれらの諸佛を供養せんより)

不如求道

堅正不卻 (道を求めて堅正にして卻かざるは如かず)

譬如恒沙

諸佛世界 (譬へば恒沙の如き諸佛の世界)

復不可計

無數刹土 (また計るべからざる無數の刹土あつて)

光明悉照

徧此諸國 (光明悉く照してこの諸國に徧く)

如是精進

威神難量 (是の如く精進にして威神力り難からんに)

令我作佛

國土第一 (我が作佛の國土をして第一ならしめん)

其衆奇妙

道場超絕 (其衆は奇妙にして道場超絶し)

的を完遂せんとする誓ひも、亦仰ぐ光に固められるのである。

大東亞戰爭の全貌から見れば、今日までの大捷は極めて重大なる意義をもつまゝに、それは尙ほ第一段階の顯はれに過ぎない。今後は之を貫き保つて第二段階も大捷、第三段階も大捷、乃至最後に遂に米英の滅し去るまで、この大捷を續けねばならない。

◇

國如泥溫

而無等雙 (國は泥垣の如くにして等雙なからん)

我當哀愍

度脫一切 (我れまさに一切を哀愍し度脫すべし)

十方來生

心悅清淨 (十方より來り生れん其の心悅清淨に)

已到我國

快樂安穩 (已に我が國に到らば快樂安穩ならしめん)

幸佛信明

是我眞證 (幸はくは佛信明したまへ是れ我が眞證なり)

發願於被

力精所欲 (願を彼れに發して所欲を力精せん)

十方世尊

智慧無礙 (十方の世尊は智慧無礙なり)

常令此尊

知我心行 (常に此尊をして我が心行を知らしめん)

假令身止

諸苦毒中 (たとひ身を諸の苦毒の中に止むとも)

我行精進

忍終不悔 (我が行は精進にして忍んで終に悔ひざらん)

武力戰に勝つとも次に次で來るところの經濟戰にも、思想戰にも打ち勝たねばならぬ。しかもそれらのすべてに打勝つてゆくためには、容易ならざる固い誓ひが立てられねばならない。

百尺竿頭更に一步を進めて云へば、たとへ米英が一通り敵性を解消し、大東亞共榮圈が打立てられてもそれではまだ物足りない。世界のすべての人々が眞に皇道の尊さを解

し、各その所を得て平等に「生けるしるしあり」と、人生を喜ぶ大平和境を實現する所まで行かねば満足できないのである。

この遠大なる目的完遂のためには、日本人は不斷に固い固い決意を以て堅忍持久で進まねばならぬが、これも前と同じやうに、たゞ一人々々が自分々々で決意するのではなく、これこそ仰ぐ光の皇國日本の姿なりと知るところに、自分勝手な我儘で破ることのできない鐵石の誓ひが立つのである。

吾々の祖先が二千六百年このかた、御國を光と仰ぐ所に絶えず誓ひを立て抜いた。

今のわれらも亦それを受けついで強く尊く、且壯んなる誓ひに勇み立つてゐるのである。

四

光を仰ぐ心は日本人に生えぬきのものであるが、人の心は養はれ育てられ鍛へられ、時には矯められねばならぬものであり、事實、日本人は上、皇室の御垂範に則り奉つて、

内外一切の事象を仰ぐ心の教養に當てゝた。千三百年の長きに互る佛教の無我の教へが、いかに個人我を捨てゝ尊い

光と一枚になる修練に、重要な役割を持つたかは史上に明らかなことであるとともに、現在から將來へかけていつまでも、この役割に研ぎをかけてます／＼力強く働かせねばならぬのである。

これから數回に互つて無量壽經の上卷の歎佛偈——「光顔巍巍として威神極りなし」に始まり「忍んでつひに悔ひざらん」に終る——二十偈（一偈は四句）の講義を續けやうとするのであるが、實はこの一段の經文は、仰ぐ光を身に受けて立てる誓ひの、最も強く最も堅い力と、誓ひの生活の壯烈なる内容とを説いたものである。無量壽經は淨土三部經の第一のお經で、法然上人の淨土の信仰の本を成すものである。

今のわれ／＼に取つて最も緊要な、光を仰ぐ心を強くし、一心の誓ひを固める修練のために、特にこの一章を取りだして、諸氏とともにその精神を味はいたいと思ふのである。先づ別項の通り歎佛偈の本文を掲げる。通讀して、その如何に仰ぐ光に固むる誓ひに盛んなるかを思ひ見るべきである。

（お斷り）都合により中村辨康先生の法語解説は本號だけ休載いたします。御諒承願ひます…（保）

編輯後記

◇朝の内から雲があらちちに動いて、その間から青空が見え始めてゐたが、やがてカラリと晴れ上り顔に汗のじむやうな暖かきになつてしまつた。長雨でしめつてゐた机や椅子からユラ／＼温氣があがつて来るのが感ぜられる。

◇事務所の窓から見ると海氣のたちきうな家々の屋根の向側に高く日章旗が二りゆう／＼つてゐる。戦地で何回となく憶へた感激を想ひ出してしばらく眺めてゐると、足もとの隣家からラジオの經濟市況が聞えてくる。

◇「あす有リと思ふ心にほだされて今日も空しく過す世の人」あすどころか來年も來々年もあるものと思ひ込んで疑ひもしない人々が株式市況の一錢二錢の高低に胸をおどらせ、一寸した思ひつきだ

けで一攫千金を夢みると云ふ、まことに落胆つた氣持だが、ほんとはこれが私達の内心なのだらう。

◇「一般の世人は相應の學問をすれば相應の金がとれる見込のあるものだと思ふ。そんな條理は成立する譯がない。學問は金に遠ざかる機械である」と漱石は云ふ。學問どころか金儲けを新願して信じてゐると思つてゐる人が多い。金を驚づかみにするのだと大聲神社にお詣りして、歸りに熊手を買い、これで金をかき集めるつもりで家の中に飾つておく。

◇かつて「宗教は個人の私事である」と云つた學者があり、私は宗教を信じなくても無事に毎日を過してゐるので宗教を持つてゐないし、これからも信仰しようとは思つてゐない」とラジオで放送した博士もあつた。丁度自分で努力しなくても自然に空氣が肺臓の中に入つて来るのだから、空氣なん

で有難くも何んともないと云ふやうなものである。

◇久し振りに天氣になれば昨日まで降り続いた雨を忘れ、これから先きは雨や風がないと決めるのと同じわけである。雨が降ればぬれない爲に傘をさすやうに、氣遣は阿彌陀さまのおかげで暮してゐるのを忘れてはいけな。

◇吉田綾二郎先生のお宅に働いてゐた女中が、女學校にまで通はせてもらつてゐた先生の恩を忘れ、逆に何がしかの持物まで持つて出奔してしまつた。先生にしてすらこの不幸がある。

◇山田繁林氏をお訪ねした際、雜誌編輯の苦心を聞き、さすがと頷けるものがあつた。

◇大野法道氏から「蘇佛偈」の講義を數回に亘つて頂けることゝなつた。御愛讀を乞ふ。

◇笠森傳策氏から同氏專攻に關する隨筆を頂いた。(村瀬)

淨土 四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和七年三月三日印刷納本
昭和七年四月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號明照會館

發行所 眞野正順

印刷所 赤尾光雄

東京市牛込區西町七

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人禮仰會

東京市芝區芝公園明照會館内

振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金一圓二十錢

(送料共)

一ケ年

腦の病・神経系統諸症・神経痛
 腦溢血・鼻・耳の病・不眠症
 綜合的優秀藥

光明丸

主治効能

腦神経系統諸病、神經病、腦神経衰弱、不眠症
 てんかん、腦膜炎、ヒステリー、小麻痺（ヒキ）腦
 梅毒、梅毒、腦溢血、半身不隨、心悸亢進症、
 逆上、耳鳴、腦貧血、頭痛、鬱血、（肩首コリ）
 神経性（耳病）、神経性（鼻病）、記憶力減退、
 思考力減退、精力減退、健忘症、性的神經病一
 切、神経性變屈症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂
 鬱症、誇大妄想、取越苦勞、雜念妄想、多夢症
 胃腸障害、便秘症、神經痛、ロイマチス、關節
 炎、以上ノ諸病ニ用ヒテ著効アリ

價 藥	
六日分	貳圓
十日分	參圓
廿日分	五圓
卅日分	七圓

全國有名藥
 店・一流百
 貨店ニアリ
 品切ノ節ハ
 直接本舖へ
 御注文下サ
 イ

試供藥と
 説明書と
 進呈

京都伏見いなり山

謹製領藥元 願 成 閣

關西代理店 大阪 合資會社 丹平商會分店
 關東代理店 東京 株式會社 丹平商會支店

昭和十七年五月廿日第一種郵便物認可（毎月一回）日發行
 昭和十七年二月廿日印刷納本、昭和十七年四月一日發行

淨 土 第八卷第四號

（印）定價金十二錢（送料）
 外埠定價金十三錢